第二十六巻

〔第一段〕　詞書

武蔵國の御家人、猪俣黨に甘糟の太郎忠綱と」いふもの侍き、ふかく上人に歸し、念佛の行」おこたりなかりけり、しかるに、山門の堂衆ハ、」獨歩のあまり衆徒を忽緒し、日吉八王子の社壇を」城墉として、悪行をたくみしかは、武士をさし」つかハしてせめられしとき、忠綱　勅に應して建久」三年十一月十五日、かの城墉にむかふに、まつ」上人に參して申やう、我等ことくの罪人なり」とも、本願をたのミて念仏せは、往生うたかひ」なきむね、日来御をしへをうけたまはりて、」ふかくそのむねを存すといへとも、それは病の」床にふして、のとかに臨終せむ時の事なり、」武士のならひ、進退こゝろにまかせされハ、山門の」堂衆を追罰のために、　勅命によりて、たゝいま」八王子の城へむかひ侍り、忠綱、武勇の家に」むまれて、弓箭の道にたつさハる、すゝみては」父祖か遺塵をうしなハす、しりそきてハ子孫の」後栄をのこさむかために、敵をふせき身を」すてハ、悪心熾盛にして願念發起しかたし、」もし、今生のかりなるいはれをおもひ、往生の」はけむへきことハりをわすれすは、かへり

て敵の」ためにとりこにせられなむ、なかく臆病の名を」と、めて、忽に譜代の跡をうしなひつへし、」いつれをすて、いつれをとるへしといふ事、愚意」わきまへかたし、弓箭の家業をもすてす、往生の」素意をもとくる道侍らは、ねかハくハ御一言を」うけ給ハらんと申けれは、上人おほせらるゝ様、」弥陀の本願ハ、機の善悪をいはす、行の多少を論」せす、身の浄不浄をえらハす、時處諸縁をきらハ」されは、死の縁によるへからす、罪人は罪人なから、」名号をとなへて往生す、これ本願の不思議なり、」弓箭の家にむまれたる人、たとひ、軍陣に」たゝかひ、命をうしなふとも、念仏せは、本願に乗し、」来迎にあつからむ事、ゆめ〳〵疑へからす、とこま」かにさつけ給けれは、不審ひらけ侍りぬ、さてハ」忠綱か往生は、今日一定なるへし、とよろこひ申」けり、上人の御袈裟を給ハりて、よろひのしたに」かけ、それよりやかて八王子の城へむかひ、命を」すてゝ戦けるに、大刀をうちをりてけれは、」ふかき疵をかうふりにけり、いまはかうとみえ」けるに、大刀をすてゝ合掌し、高聲念佛」して、敵のために身をまかせけり、紫雲戦場」にたれおほひて、異香をかく人おほかりけり、」北嶺に紫雲たなひくよし、人申けれハ、上人」きゝたまひて、あハれ甘糟か往生しつるよ、とそ」おほせられける、甘糟、くにゝとゝめをく妻室の」ゆめに、極樂の往生を遂ぬるよしをしめしけれハ、」夢の告にをとろきて、國より飛脚をたて

けるに、」この事を告て京よりくたりけるつかひに」ゆきあひて、ゐ中の夢の告、戦場の往生のやう、」たかひにかたりけり、まことに不思議の事」にてそありける、戦場に命をすてゝ往生の」前途をとけ、父祖か名をもあけ、本願の深意」をもあらハせる事、しかしなから、これ上人」観化の故なりき、」

甘糟太郎忠綱、法然上人の教えを受け、戦場で奇瑞往生す

釈文

武蔵国の御家人、猪俣党に甘糟の太郎忠綱という者侍りき。深く上人に帰し、念仏の行怠りなかりけり。然るに、山門の堂衆等、独歩の余り衆徒を忽緒し、日吉八王子の社壇を城郭として悪行を企みしかば、武士を差し遣わして攻められし時、忠綱、勅に応じて建久三年十一月十五日、彼の城郭に向かうに、まず上人に参じて申す様、「我等如くの罪人なりとも、本願を憑みて念仏せば、往生疑いなき旨、日来御教えを承りて、深くその旨を存ずと雖も、それは病の床に臥して、閑かに臨終せむ時の事なり。武士の習い、進退心に任せざれば、山門の堂衆を追罰の為に、勅命によりて、唯今八王子の城へ向かい侍り。忠綱、武勇の家に生まれて、弓箭の道に携わる。進みては父祖が遺塵を失わず、退きては子孫の後栄を残さむが為に、敵を防ぎ身を捨てば、悪心熾盛にして願念発起

弥陀の本願は、機の善悪をいわず、行の多少を論ぜず、身の浄不浄を選ばず、時処諸縁を嫌わず

日吉八王子の城

し難し。若し、今生の仮なる謂れを思い、往生の励むべき理を忘れずば、却りて敵の為に虜にせられなむ。長く臆病の名を留めて、忽ちに譜代の跡を失いつべし。何れを捨て、何れを取るべしという事、愚意弁え難し。弓箭の家業をも捨てず、往生の素意をも遂ぐる道侍らば、願わくば御一言を承らん」と申しければ、上人仰せらるる様、「弥陀の本願は、機の善悪をいわず、行の多少を論ぜず、身の浄・不浄を選ばず、時処・諸縁を嫌わざれば、死の縁によるべからず。罪人は罪人ながら、名号を唱えて往生す。これ本願の不思議なり。弓箭の家に生まれたる人、仮令、軍陣に戦い、命を失うとも、念仏せば、本願に乗じ、来迎に与らむ事、努々疑うべからず」と細かに授け給いければ、不審開け侍りぬ。「さては忠綱が往生は、今日一定なるべし」と喜び申しけり。上人の御袈裟を賜りて、鎧の下に掛け、それよりやがて八王子の城へ向かい、命を捨てて戦いけるに、大刀を打ち折りてければ、深き疵を被りにけり。今は斯うと見えけるに、大刀を捨てて合掌し、高声念仏して、敵の為に身を任せけり。紫雲戦場に垂れ覆いて、異香を嗅ぐ人多かりけり。北嶺に紫雲棚引く由、人申しければ、上人聞き給いて、「哀れ、甘糟が往生しつるよ」とぞ仰せられける。甘糟、国に留め置く妻室の夢に、極楽の往生を遂げぬる由を示しければ、夢の告げに驚きて、国より飛脚

を立てけるに、この事を告げて京より下りける使いに行き会いて、田舎の夢の告げ、戦場の往生の様、互いに語りけり。真に不思議の事にてぞありける。戦場に命を捨てて往生の前途を遂げ、父祖が名をも上げ、本願の深意をも現わせる事、然しながら、これ上人勧化の故なりき。

〔第二段〕　詞書

宇津宮の弥三郎頼綱、家子郎従濟〻として、「武蔵野をすきけるに、熊谷の入道ゆきあひて、」いふやう、いミしく大勢にておハするものかな、但」いかにおほくとも、無常の敦鬼はふせきかたく」や侍らん、弥陀如来の本願にて、念佛するものをハ、」悪道にをとさす、むかへとり給へは、一人當千の」つハものにもなをまさりたるハ、これ念仏なり、」かまへて念佛し給へ、と申けるか、きもにそみて」おほえける、のち念仏往生に心をかけて、大番」勤仕のために上洛したりけるついてに、承元」二年十一月八日、上人の勝尾の草菴にたつね」参して、念仏往生の法、御教訓をかうふるとき、上来」雖説、定散両門之益、望佛本願、意在衆生、一向」専稱弥陀佛名の文を、ふたゝひ誦したまひて、」往生せうせしは、わとの、心そ、一向に念仏せは、」往生うたかひなし、との給ける御ことハ、耳にとゝまりて」おほえける、のち、一向専修の

行者になりにけり、」上人御往生の後ハ、ふかく善恵房をたのミ申」けるか、結縁のために、四帖の疏の文字よミはか」りをうけ、つゐに出家して、實信房蓮生と号し、」西山に草庵をしめ、一向専念のほか他事なか」りき、仁治二年十一月廿二日、天はれ風しつかなる」夜、蓮生ゆめミらく、深山幽谷の北に、一の庵室」あり、蓮生この中に侍り、小山めくりかさなり、」左右の峯たかくそひえたり、なを北の山をみるに、」三尺はかりの弥陀の立像、虚空に影向したまふ、」いつれのところよりきたりましますにか、と疑を」なすところに、虚空にこゑありて、佛来臨の方ハ、」善光寺なりとこたふ、仏やうやくちかつきたまひ、」光明爀烋として、白玉のかさり、まことに妙なり、」このとき、蓮生高聲に念佛し、右の手をもて、」佛の左の御手をにきりたてまつるに、はしめて」木像の来現としり、又、年来安置の本尊なりと」さとりぬ、夢さめてのちは、いよ〳〵信心をふかくし、」念佛のいさミをなし、行住坐臥の四威儀、たゝ」稱名のほか他事をわする、正元ゝ年十一月上旬」の比より、いさゝか病悩の事侍けるか、同十二日」端坐合掌、念仏相續し、瑞相あらはれて、往生の」素懐をとけゝるとなむ、」

宇都宮弥三郎頼綱、発心念仏、奇瑞往生す

勝尾の草庵

善恵房をたのむ

出家して実信房蓮生と号す

釈文

宇都宮の弥三郎頼綱、家子郎従済々として武蔵野を過ぎけるに、熊谷の入道行き会いて、言う様、「いみじく大勢にておわするものかな。但し如何に多くとも、無常の殺鬼は防ぎ難くや侍らん。弥陀如来の本願にて、念仏する者をば、悪道に墜とさず迎え取り給えば、一人当千の兵にも猶勝りたるは、これ念仏なり。構えて念仏し給え」と申しけるが、胆に染みて覚えける。後、念仏往生に心を掛けて、大番勤仕の為に上洛したりける序に、承元二年十一月八日、上人の勝尾の草庵に訪ね参じて、念仏往生の法、御教訓を被る時、「上来雖説、定散両門之益、望仏本願、意在衆生、一向専称、弥陀仏名」の文を再び誦し給いて、「往生しょうせじは、吾殿の心ぞ。一向に念仏せば、往生疑いなし」と宣いける御言葉、耳に留まりて覚えける。後、一向専修の行者になりにけり。上人御往生の後は、深く善恵房を馮み申しけるが、結縁の為に、『四帖の疏』の文字読みばかりを受け、遂に出家して実信房蓮生と号し、西山に草庵を占め、一向専念の外、他事なかりき。仁治二年十一月二十二日、天晴れ風静かなる夜、蓮生夢見らく、深出幽谷の北に一の庵室あり。蓮生この中に侍り、小山廻り重な

蓮生、高声に念仏

り、左右の峯高く聳えたり。猶北の山を見るに、三尺ばかりの弥陀の立像、虚空に影向し給う。何れの所より来りましますにか、と疑いを為す所に、虚空に声ありて、「仏来臨の方は、善光寺なり」と答う。仏漸く近付き給い、光明赫々として、白玉の飾り、真に妙なり。この時、蓮生高声に念仏し、右の手をもて仏の左の御手を握り奉るに、初めて木像の来現と知り、又、年来安置の本尊なりと悟りぬ。夢覚めて後は、愈々信心を深くし、念仏の勇みを成し、行住坐臥の四威儀、唯称名の外他事を忘る。正元々年十一月上旬の頃より、聊か病悩の事侍りけるが、同十二日端坐合掌、念仏相続し、瑞相現われて、往生の素懐を遂げけるとなむ。

〔第三段〕　詞書

上野國の御家人、薗田の太郎成家ハ、秀郷の」将軍九代の孫、薗田の次郎成基か嫡男なり、」武勇の道にたつさはりて、弓馬の藝をたし」なみ、射獵を事として、罪悪をほしきまゝにす、」爰正治二年の秋、大番勤仕のために上洛の时、」上人の念佛弘通化導さかりにして、貴賤あゆ」ミをはこふよし傳聞て、宿縁のもよをしけるにや、」かの菴室へ參したりけるに、上人、罪悪生死」の凡夫、弥陁の本願に乗して極樂に往生

する」いはれ、世上の無常をいとひ、浄土の不退をねかふ」へきおもむき、ねむころに教化し給に、信心胷」にみち、渇仰肝に銘しけれハ、やかてそのとし」の十月十一日、生年廿八歳にて出家す、法名を」智明とそつけ給へりける、常随給仕六ケ年」のゝち、元久二年に本國に下向して、家子郎従」廿余人を教導して、おなしく出家せさせて、」同行として、酒長の御厨小倉の村に菴室を」むすひて、一心に弥陁を念し、三業を西方には」こひけり、世の人たうとひて、小倉の上人とそ申」ける、菴室の西一町餘をへたてゝ、一間四面の」御堂を建立して、御堂の妻戸に菴室」の戸をあけあはせて、佛前の燈明を攝」取の光明とおもひて、常に光明遍照の」文をとなへ發露涕泣しけり、具縛の凡」夫なりとも、本願をたのみて念佛せハ、往生」うたかひあるへからさるむね、上人しめし給ける」を、ふかく心苻におさめて、行住坐臥に念佛をこた」る事なし、おほよそ、念佛の外他事をましへ」さりけり、念佛せさるものをはは ちしめいとひけれハ、」かの室にのそむ道俗尊卑、念仏せぬハなかり」けり、あるとし、元日の祝言に下僧一人に心をあは」せて、庭前にすゝみいてゝ、たからかに物申さむと」いはせて、西方浄土より、御參をそく侍り、いそき御」參あるへしと、阿弥陁佛の御使なりと申させて、歡」毛のあまり客殿へ請し入て、丁寧にもてなし、」種〻の引出物をそ給ハせける、そのゝちハとしことの」事にて、元日にハこのわさをな

ん結構しける、かの」山里にハ鹿おほかりけれハ、作毛をまたくせむた」めに、かのところの人民ハ、田畠にかきをしまはして、」ふせきけるをあはれみなけきて、上田三町をつ」くりたてさせて、鹿田となつけて、鹿のくひものに」あてけるにも、田哥といふ事には、念佛をなん」唱させける、寶治二年九月十五日、いさゝか違例の」氣あり、舍弟淡路守俊基をまねきよせて、」我身ハ老病あひをかして、すてに終焉にのそ」めり、今生の對面今日ハかりなり、汝罪悪深重の」人なり、かならす念佛して、おなしく安養の浄」刹に參會せしむへし、たとひ、鹿鳥を食すとも、」念佛をハかみませて申すへし、たとひ、敵にむか」ひて弓をひくとも、念佛をすつる事なかれ、と」さま〳〵に教訓しけり、俊基還向のゝち、僧衆あひと」もに別时の念佛を修して、翌日十六日戌刻に、」端坐合掌して、光明遍照の文を誦し、高聲」念佛一时ハかりとなへて、禪定に入かことくにて」いきたえにけり、生年七十五なり、于时紫雲屋」上にたなひき、音樂雲外にきこえて、持佛堂」菴室のあひたに光明充満し、室の内外に旻」香薫す、遠近の道俗男女これを見聞す、平」生のむかしより、攝取の光明に心をよせける」に、はたしてかの光明を感得しける、不思議」にたうとくも侍かな、」

蘭田の太郎成家、出家念仏し、奇瑞往生す

成家出家
法名智明

小倉の上人

具縛の凡夫

釈文

上野国の御家人、蘭田の太郎成家は、秀郷の将軍九代の孫、蘭田の次郎成基が嫡男なり。武勇の道に携わりて、弓馬の芸を嗜み、射猟を事として、罪悪を恣にす。爰に正治二年の秋、大番勤仕の為に上洛の時、上人の念仏弘通・化導盛りにして、貴賤歩みを運ぶ由伝え聞きて、宿縁の催しけるにや、彼の庵室へ参じたりけるに、上人、罪悪生死の凡夫、弥陀の本願に乗じて極楽に往生する謂れ、世上の無常を厭い、浄土の不退を願うべき趣、懇ろに教化し給うに、信心胸に満ち、渇仰肝に銘じければ、やがてその年の十月十一日、生年二十八歳にて出家す。法名を智明とぞ付け給えりける。常随給仕六ケ年の後、元久二年に本国に下向して、家子郎従二十余人を教導して、同じく出家せさせて、同行として、酒長の御厨小倉の村に庵室を結びて、一心に弥陀を念じ、三業を西方に運びけり。世の人貴びて、小倉の上人とぞ申しける。庵室の西一町余りを隔てて一間四面の御堂を建立して、御堂の妻戸に庵室の戸を開け合わせて、仏前の灯明を摂取の光明と思いて、常に「光明遍照」の文を唱え、発露涕泣しけり。具縛の凡夫なりとも、本願を憑みて念仏せば、往生疑いあるべか

元日の祝言

舎弟淡路守俊基を招き寄せる

僧衆相共に別時の念仏を修す

らざる旨、上人示し給いけるを、深く心府に収めて、行住坐臥に念仏怠る事なし。凡、念仏の外他事を交じえざりけり。念仏せざる者をば恥じしめ厭いければ、彼の室に臨む道俗尊卑、念仏せぬはなかりけり。或る年、元日の祝言に、下僧一人に心を合わせて、庭前に進み出でて、高らかに「物申さむ」と言わせて、「西方浄土より、御参り遅く侍り、急ぎ御参りあるべしと、阿弥陀仏の御使なり」と申させて、歓喜の余り客殿へ請じ入れて、丁寧に持て成し、種々の引出物をぞ賜せける。その後は、年毎の事にて、元日にはこの業をなん結構しける。彼の山里には鹿多かりければ、作毛をまったくせむ為に、彼の所の人民等、田畑に垣を為回して防ぎけるを哀れみ嘆きて、上田三町を作り立てさせて、鹿田と名付けて鹿の食い物に当てけるにも、田歌という事には、念仏をなん唱えさせける。宝治二年九月十五日、聊か違例の気あり。舎弟淡路守俊基を招き寄せて、「我が身は老病相冒して、既に終焉に臨めり。今生の対面今日ばかりなり。汝罪悪深重の人なり。必ず念仏して、同じく安養の浄刹に参会せしむべし。仮令、鹿・鳥を食すとも、念仏をば嚙み混ぜて申すべし。仮令、敵に向かいて弓を引くとも、念仏を捨つる事なかれ」とさまざまに教訓しけり。俊基還向の後、僧衆相共に別時の念仏を修して、翌日（十六日）戌刻に端坐合掌して、「光明遍

照」の文を誦し、高声念仏一時ばかり唱えて、禅定に入るが如くにて息絶えにけり。生年七十五なり。時に紫雲屋上に棚引き、音楽雲外に聞こえて、持仏堂庵室の間に光明充満し、室の内外に異香薫ず。遠近の道俗男女これを見聞す。平生の昔より、摂取の光明に心を寄せけるに、果たして彼の光明を感得しける、不思議に貴くも侍るかな。

〔第四段〕　詞書

西明寺の禅門、若冠の时ハ、つねに念佛の安心」なと、小倉の草菴へそたつねられける、爰」寛元のころ、使を進して申をくりけるは、年」來念佛の行者として、西方をねかふ心ねんころ」なり、栗の木とは、西の木とかけり、西方の行人と」して、むつましくおほえ侍れハ、多年これを所持」すといへとも、老躰いまにをきてハ、行歩に」あたはす、その要なきににたり、君西土に心を」はこひまし、この杖をさつけたてまつるに」たへたり、これをもちゐて、浄土にまいらしめ」給へしとて、栗の木の杖をゝくり進したりけ」れは、返状のをくに、」

おいらくの、ゆくすゑかねて、おもふにハ、

つく〳〵うれし、にしの木のつへ、

とそかきをくられける、禪門、其後ハかの勸化を」信して、つねに西土の託生を心にかけ、弥陁の引」接をそたのまれける、されハ弘長二年のころ、」上人の孫才敬西房法蓮房才子関東下向のとき、上人の」傳を進たりけるに、数日披覧の後、上人の徳行を」たうとみて、念佛の安心をたつねられけ」れハ、往生の故実、勤行の文なとをかきてたて」まつりけり、禪門自筆の返状云、故実ならひ」に勤行の文給候ぬ、よく〳〵見覚候て、往生の」心をすゝむへく候、云ゝ、取詮、つゐに翌年弘長三十」一月廿二日亥剋、臨終正念端坐合掌して、往生を」とけらる、同十二月十五日、諏方の入道蓮佛、敬西房」に送遣状云、西明寺殿御往生の事、中〳〵不及申、」目出き次才にて候、十一月廿二日亥时に、唐ころもめし」てけさかけて、西方にあミたほとけをかけまいら」せて、ゐすにのほらせ給て、御いきすこしもみたれ」す、合掌して御往生候也、御いたはりとて候しかとも、」すこしも御苦痛候ハす、然へき御往生の因縁」にて候けりと覚候、御臨終ちかくなり候て、かたし」けなき仰をかふりて候き、あみたほとけの御ちか」らにて、浄土へまいりたらハ、むかへうするそ、と」仰の候しかハ、日ころ不足なくかうふりて候し御」恩にハ、百倍千倍してたのもしくありかたく」覚候て、歎のなかにもうれしく候、故入道とのゝ」仰に、蓮仏、地獄におとさぬやうに教訓候へ、と仰候」けるよしうけ給候へハ、念佛往生の次才、便宜に、」かならすこま

かに仰給へく候、云ゝ、取詮、抑、かの禪門、」武将の賢哲、柳栄の指南として、若冠のそ」のかみより、寐後のをはりまて、上人勸化の風」をうけ、西土往生の望をとけられけるに、蓮佛」を極樂に引導すへきよしまて、病中にち」きり給けむ、あはれにかしこくそ覚侍る、」

西明寺の禪門、小倉の草庵を尋ねる

釈文

西明寺の禪門、若冠の時は、常に念仏の安心など、小倉の草庵へぞ尋ねられける。爰に寛元の頃、使いを進じて申し送りけるは、「年来念仏の行者として、西方を願う心懇ろなり。栗の木とは、西の木と書けり。西方の行人として、睦じく覚え侍れば、多年これを所持すと雖も、老体今に於きては、行歩に能わず。その要なきに似たり。君西土に心を運びます。この杖を授け奉るに堪えたり。これを用いて、浄土に参らしめ給うべし」とて、栗の木の杖を送り進じたりければ、返状の奥に、

栗の木の杖を進ぜられたるときの返歌

老いらくの行く末かねて思うには
つくづく嬉し西の木の杖

とぞ書き送られける。禪門、其の後は彼の勸化を信じて、常に西土の託生を心に

敬西房、上人の伝を進ず

入道蓮仏、敬西房へ状を送る

掛け、弥陀の引接をぞ憑まれける。されば弘長二年の頃、上人の孫弟敬西房（法蓮房が弟子）関東下向の時、上人の伝を進じたりけるに、数日披覧の後、上人の徳行を貴みて、念仏の安心を尋ねられければ、往生の故実、勤行の文などを書きて奉りけり。禅門自筆の返状に云く、「故実並びに勤行の文賜り候いぬ。能く能く見覚え候いて、往生の心を勧むべく候、云々」（詮を取る）。遂に翌年（弘長三）十一月二十二日亥刻、臨終正念端坐合掌して、往生を遂げらる。同十二月十五日、諏訪の入道蓮仏、敬西房に送り遣わす状に云く、「西明寺殿御往生の事、中々申すに及ばず、目出たき次第にて候。十一月二十二日亥刻に、唐衣召して袈裟掛けて、西方に阿弥陀ほとけを掛け参らせて、椅子に登らせ給いて、御息少しも乱れず、合掌して御往生候也。御労りとて候いしかども、少しも御苦痛候わず、然るべき御往生の因縁にて候いけりと覚え候。御臨終近くなり候いて、忝き仰せを被りて候いき。阿弥陀ほとけの御力にて、浄土へ参りたらば、迎えうするぞと仰せの候いしかば、日頃不足なく被りて候いし御恩には、百倍千倍して頼もしく有難く覚え候いて、歎きの中にも嬉しく候。故入道殿の仰せに、蓮仏、地獄に堕とさぬ様に教訓候えと仰せ候いける由承り候えば、念仏往生の次第、便宜に必ず細かに仰せ給うべく候、云々」

（詮を取る）。抑、彼の禅門、武将の賢哲、柳営の指南として、弱冠のその上より、最後の終わりまで、上人勧化の風を承け、西土往生の望を遂げられけるに、蓮仏を極楽に引導すべき由まで、病中に契り給いけむ、哀れに賢くぞ覚え侍る。

〔奥書〕

廿六巻新撰数廿三丁

四十八巻繪傳　知恩院

常住

第二十七巻

〔第一段〕　詞書

武藏國の御家人、熊谷の次郎直實ハ、平家」追討のとき、所〻の合戦に忠をいたし、名をあけし」かは、武勇の道ならひなかりき、しかるに、宿善」のうちにもよをしけるにや、幕下將軍をうら」み申事ありて、心をゝこし、出家して蓮生と」申けるか、聖覺法印の房にたつねゆきて、」後生菩提の事をたつね申けるに、さやうの」事ハ、法然上人にたつね申へし、と申されけ」れハ、上人の御菴室に參しにけり、罪の輕重」をいはす、たゝ、念佛たにも申せハ往生するなり、」別の樣なし、との給をきゝて、さめ〳〵と泣けれハ、」けしからすと思たまひて、ものもの給はす、し」はらくありて、なに事に泣給そ、と仰られ」けれハ、手足をもきり、命をもすてゝそ、後生」ハたすからむするとそ、うけ給ハらむすらん」と存するところに、たゝ、念佛たにも申せハ、」往生ハするそと、やす〳〵と仰をかふり侍れは、」あまりにうれしくて、なかれ侍るよしをそ申」ける、まことに後世を恐たるものと見えけれハ、」無智の罪人の念佛申て往生する事、本願」の正意なりとて、念佛の安心こまかにさつ」け給け

れハ、ふた心なき専修の行者にて、ひさ」しく上人につかへたてまつりけり、或时、上人」月輪殿へ参し給けるに、この入道推參して、」御共にまいりけるを、とゝめはやと思食されけ」れとも、さるくせものなれハ、中〳〵あしかりぬと」思食て、仰らるゝむねなかりけれハ、月輪殿ま」てまいりて、くつぬきに候して、縁に手うちかけ、」よりかゝりて侍けるか、御談儀のこゑのかすかに」きこゑけれハ、この入道申けるハ、あはれ、穢」土ほとに口おしき所あらし、極樂にはかゝる」差別ハあるましきものを、談儀の御こゑも」きこえハこそ、としかりこゑに高聲に申」けるを、禪定殿下きこしめして、こハなに」ものそと仰られけれハ、熊谷の入道とて、武藏」國よりまかりのほりたるくせものゝ候か、推參に」共をして候と覚候、と上人申給けれハ、やさしく、」たゝ、めせとて、御使を出されてめされけるに、」一言の色題にも及はす、やかて、めしにしたか」ひて、ちかくおほゆかに祗候して聴聞仕けり、」往生極樂ハ當來の果報なをとをし、忽に」堂上をゆるされ、今生の花報を感しぬる事、」本願の念佛を行せすは、争この式に及」へきと、耳目をとろきてそ見えける、」

釈文

武蔵国の御家人、熊谷の次郎直実は、平家追討の時、所々の合戦に忠を致し、

出家して蓮生聖覚法印の房から法然上人の庵室へ

蓮生、さめざめと泣く

無智の罪人の念仏往生は本願の正意

名を揚げしかば、武勇の道並びなかりき。然るに、宿善の内に催しけるにや、幕下将軍を恨み申す事ありて、心を起こし、出家して蓮生と申しけるが、聖覚法印の房に尋ね行きて、後生菩提の事を尋ね申しけるに、「左様の事は、法然上人に尋ね申すべし」と申されければ、上人の御庵室に参じにけり。「罪の軽重を言わず、唯、念仏だにも申せば往生するなり。別の様なし」と宣うを聞きて、さめざめと泣きければ、怪しからずと思い給いて、物も宣わず。暫くありて、「何事に泣き給うぞ」と仰せられければ、「手足をも切り、命をも捨ててぞ、後生は助からむずるとぞ、承らむずらんと存ずる所に、唯、念仏だにも申せば、往生はするぞと、易々と仰せを被り侍れば、余りに嬉しくて、泣かれ侍る」由をぞ申しける。真に後世を恐れたるものと見えければ、「無智の罪人の念仏申して往生する事、本願の正意なり」とて、念仏の安心細かに授け給いければ、二心なき専修の行者にて、久しく上人に仕え奉りけり。或る時、上人月輪殿へ参じ給いけるに、この入道推参して、御供に参りけるを、止めばやと思食されけれども、さる曲者なれば、中々悪しかりぬと思食して、仰せらるる旨なかりければ、月輪殿まで参りて、沓脱ぎに候して、縁に手うち掛け、寄り掛かりて侍りけるが、御談議の声の微かに聞こえければ、この入道申しけるは、「哀れ、穢

土ほどに口惜しき所あらじ。極楽には斯かる差別はあるまじきものを。談義の御声も聞こえばこそ」と叱り声に高声に申しけるを、禅定殿下聞し召して、「此は何者ぞ」と仰せられければ、「熊谷の入道とて、武蔵国より罷り上りたる曲者の候が、推参に供をして候と覚え候」と上人申し給いければ、優しく唯、「召せ」とて、御使いを出されて召されけるに、一言の式代にも及ばず、やがて、召しに従いて、近く大床に祗候して聴聞仕りけり。往生極楽は当来の果報猶遠し。忽ちに堂上を許され、今生の果報を感じぬる事、本願の念仏を行ぜずば、争でかこの式に及ぶべきと、耳目驚きてぞ見えける。

蓮生、大床にて談議を聴聞

〔第二段〕　詞書

蓮生、念佛往生の信心決定してのちハ、ひとへ」に上品上生の往生をのそみ、われ、もし上品上生」の往生を遂ましくハ、下八品にはむかへられまいら」せし、といふかたき願をおこして、發願の旨趣をの」へ、偈をむすひてみつからこれをかきつく、かの状云、」元久元年五月十三日、鳥羽なる所にて、上品上生」の來迎の阿弥陀ほとけの御まへにて、蓮生、願を」おこして申さく、極樂にうまれたらんにハ、身の」ふの程ハ、下品下生なりとも限なし、然而、天台の」御尺に、下之八品不可來生と仰られ

たり、お」なしくハ一切の有縁の衆生、一人ものこさす來迎せん、無縁の衆生までも、おもひをかけてと」ふらハむかために、蓮生、上品上生にうまれん、さ」らぬ程ならハ下八品にハうまるまし、かく願を」おこして後に、又云、恵心の僧都すら下品の上生」をねかひ給たり、何況、末代の衆生、上品上生す」る者ハ一人もあらしと、ひしりの御房の仰こと」あるをきゝなから、かゝる願をおこしはてゝいはく、」末代に上品上生する者あるましきに、しかも」よろつ不當なる蓮生、いかて上品上生にハうま」るへきそ、さなくハ下八品にはむまれし、とくわん」したれハとて、あミたほとけもし迎給ハすは、才」一に弥陁の本願やふれ給なんす、次に弥陁の」慈悲、かけ給なんす、次に弥陁の願成就の文、や」ふれ給なんす、次に釋迦の觀無量壽經の、十悪」の一念往生、五逆の十念往生、又、阿弥陁経の、もし」ハ一日、もしハ七日の念佛往生、又、六方恒沙の諸仏」の證誠、又、善導和尚の下至十聲一聲不定得」往生の尺、又、なによりも、觀經の上品上生の三心」具足の往生、それを善導の尺の具足三心必得」往生也、若少一心即不得生、又、専修のものハ、千ハ」千なからの尺、こと〳〵くこれら、佛の願といひ、仏」の言といひ、善導の尺といひ、もしれんせいを迎」給ハすは、ミなやふれておの〳〵妄語のつみ得」たまひなんす、いかてか大聖の金言むなし」かるへきや、又、光明遍照十方世界の文、又、此界一」人念佛名の文、この

金言ともむなしからし、」いよ〳〵これらの文をもて、疑なき也とおもふ、一切」の有縁の輩、即たちかへりてむかえんとて、願を」おこして上品上生ならすは、むかへられまい」らせしといふ、かたき願をおこしたるか、よくひか」事ならんちやう、五逆の者ハかりハあらし、しか」れハ、いかなりとも迎給はぬことあらし、これを」疑はぬ心ハ、三心具足したり、上品上生にむまる」へき決定心おこしたり、その疑煩悩断したり、」そのさとりをひらいたり、善導又天台、この」事を見るものハ、上品上生にむまる、又、衆生の」苦をぬく事を得、又、無生忍をさとる、又、極樂」に所願にしたかひてむまるとの給へり、」

下八品の往生、　　われすてゝしかもねかハす、」

かの國土にいたりをはて、　　すなハちかへり來事あたハされハ也、」

かさねてこふ、我願において、　　或ハ信し、或ハ信せさらんもの、」

ねかハくハ信と謗とを因として、　　みなまさに浄土にむまるへし、」

于时元久元年五月十三日午时に、偈の文をむす」ひて、蓮生いま願をおこす、熊谷の入道、としハ」六十七也、京の鳥羽にて上品上生のむかへの曇陁羅の御まへにてこれをかく、已上、取詮、又、和字の偈の」文を隆寛律師、漢字にかきなされける、」

下八品往生、　　我捨而不願、」

到彼國土已、　即不能還来、」
重乞於我願、　或信或不信、」
願信謗為因、　皆當生浄土、」

又、蓮生自筆の夢の記云、上品上生にむまるへし」といふ夢、たひ〳〵見たり、そハの人も見て告たり、」善導ハゆめを見てさとりて、觀經の疏ハ作給へ」り、恵心又、往生要集、ゆめをみて記し給へり、」又珎海、決定往生の集、ゆめをみて記し給へり、」法花經に、四安樂の行者の夢の中の八相を」記し給へり、しかるに、れんせい、五月十三日にこの」願をおこして、同廿二日の夜、阿ミた佛に申さく、」蓮生かおこして候願、成就すへくハ、疑ましからん」御示現たへ、又、叶ましくハ、叶ましと示現たへ、」となたさまにも、うたかふましからん示現たへ、と申」てねたる、そのすなハち夢に見るやう、金色の」蓮の花のくきハなかくてゑたもなくて、そろ〳〵」としてたゝ一本たちたるに、そのめくりに人」十人ハかり居まはりてあるに、蓮生申ことそ、」こと人は一人もあれか上にハのほりえし、蓮生」一人ハ、一定のほるへき也、といひはつれハ、いかにし」てのほりたりともおほえすして、その蓮の花」の上にのほりて、端坐して居たりと見はつれハ、」夢さめ畢ぬ、又、願をおこす、この願まこと」なるへくハ、臨終にゆゝしからん人〳〵、耳目おと」ろくハかりの瑞相を、まつ

現して、もろ〳〵の人」に、弥陁の本願見うらやませ給へ、とおこし」たり、故に上品上生の往生、いよ〳〵疑なき也、」又、同年六月廿三日の夢、おなし心也、（已上、取詮、）」

蓮生自筆の發願の文、夢記不ハ、みな」和字なりといへとも、よみにくきによりて、」少々漢字になす、」

蓮生、上品上生の往生を望む上品上生、大願をおこすの文

釈文

蓮生、念仏往生の信心決定して後は、偏に上品上生の往生を望み、「我、若し上品上生の往生を遂げまじくば、下八品には迎えられ参らせじ」という固き願を起こして、発願の旨趣を述べ、偈を結びて自らこれを書き付く。彼の状に云く、「元久元年五月十三日、鳥羽なる所にて、上品上生の来迎の阿弥陀ほとけの御前にて、蓮生、願を起こして申さく、「極楽に生まれたらんには、身の楽しみの程は、下品下生なりとも限りなし。然而、天台の御釈に、下の八品は来生すべからずと仰せられたり。同じくは一切の有縁の衆生、一人も残さず来迎せん。無縁の衆生までも、思いを掛けて訪わむが為に、蓮生、上品上生に生まれん。さらぬ程ならば、下八品には生まるまじ」。斯く願を起こして後に、又云く、「恵心の僧都すら下品の上生を願い給いたり。何に況や末代の衆生、上品上生す

る者は一人もあらじ」と、聖の御房の仰せ事あるを聞きながら、斯かる願を起こし果てて云く、「末代に上品上生する者あるまじきに、然も万不当なる蓮生、如何で上品上生には生まるべきぞ。さなくば下八品には生まれじ、と願じたればとて、阿弥陀ほとけ若し迎え給わずば、第一に弥陀の本願破れ給いなんず。次に弥陀の慈悲、掛け給いなんず。次に弥陀の願成就の文、破れ給いなんず。次に釈迦の『観無量寿経』の、十悪の一念往生、五逆の十念往生、又、『阿弥陀経』の、若しは一日、若しは七日の念仏往生、又、六方恒沙の諸仏の証誠、又、善導和尚の下至十声一声等定得往生の釈、又、何よりも、『観経』の上品上生の三心具足の往生、それを善導の釈の具足三心必得往生也、若少一心即不得生、又、専修の者は、千は千ながらの釈、悉くこれら、仏の願といい仏の言といい、善導の釈といい、若し蓮生を迎え給わずば、皆破れて各々妄語の罪得給いなんず。いかでか大聖の金言虚しかるべきや。又、「光明遍照十方世界」の文、又、「此界一人念仏名」の文、この金言とも虚しからじ。愈々これらの文をもて、疑いなき也と思う。一切の有縁の輩、即ち立ち帰りて迎えん」とて、願を起こして、上品上生ならずば、迎えられ参らせじという、固き願を起こしたるが、能く僻事ならん条、五逆の者ばかりはあらじ。然れば、如何なりとも迎え給わぬ

蓮生を迎え給わずば、皆妄語の罪を得給う

事あらじ。これを疑わぬ心は、三心具足したり。上品上生に生まるべき決定心起こしたり。その疑煩悩断じたり。その悟りを開いたり。善導又天台、「この事を見る者は、上品上生に生まる、又、衆生の苦を抜く事を得、又、無生忍を悟る。又、極楽に所願に従いて生まる」と宣えり。

下八品の往生、我捨てて然も願わず、
彼の国土に到り畢りて、則ち還り来る事能わざれば也。
重ねて乞う、我が願に於いて、或は信じ、或は信ぜざらん者、
願わくば信と謗とを因として、皆当に浄土に生まるべし。

時に元久元年五月十三日午時に、偈の文を結びて、蓮生今願を起こす。熊谷の入道、歳は六十七なり。京の鳥羽にて上品上生の迎えの曼陀羅の御前にてこれを書く」（已上、詮を取る）。又和字の偈の文を、隆寛律師、漢字に書き成されける。

和字の偈文

下八品往生　我捨而不願
到彼国土已　即不能還来
重乞於我願　或信或不信
願信謗為因　皆当生浄土

隆寛、漢字に直す

又、蓮生自筆の『夢の記』に云く、「上品上生に生まるべしという夢、度々見たり。傍の人も見て告げたり。善導は夢を見て悟りて、『観経の疏』は作り給えり。恵心又、『往生要集』、夢を見て記し給えり。又珍海、『決定往生の集』、夢を見て記し給えり。『法華経』に、四安楽の行者の夢の中の八相を記し給えり。然るに、蓮生、五月十三日にこの願を起こして、同二十二日の夜、阿弥陀仏に申さく、「蓮生が起こして候願、成就すべくば、疑うまじからん御示現賜べ。又、叶うまじくば、叶うまじと示現賜べ。何方様にも、疑うまじからん示現賜べ」と申して寝たる、その則ち夢に見る様、金色の蓮の花の茎は長くて枝もなくて、そろそろとして唯一本立ちたるに、その回りに人十人ばかり居廻りて在るに、蓮生申す事ぞ、「異人は、一人もあれが上には登り得じ。蓮生一人は、一定登るべき也」と言い果つれば、如何にして登りたりとも覚えずして、その蓮の花の上に登りて、端坐して居たりと見果つれば、夢覚め畢んぬ。又、願を起こす。「この願真なるべくば、臨終に由々しからん人々、耳目驚くばかりの瑞相を、まず現じて、諸々の人に、弥陀の本願見羨ませ給え」と起こしたり。故に上品上生の往生、弥々疑いなき也。又、同年六月二十三日の夢、同じ心也」(已上、詮を取る)。

蓮生自筆の『発願の文』『夢記』等は、皆和字なりと雖も、読み難きによりて、少々漢字に成す。

〔第三段〕　詞書

蓮生、行住坐臥不背西方の文を、ふかく信」しけるにや、あからさまにも、西をうしろに」せさりけれハ、京より関東へ下ける时も、鞍を」さかさまにをかせて、馬にもさかさまにのり」て、口をひかせけるとなん、されハ蓮生、」

浄土にも、かうのものとや、沙汰すらん、」

西にむかひて、うしろみせねハ、」

とそ詠しける、上人も、信心堅固なる念佛の」行者のためしにハ、常におもひいて給て、坂」東の阿ミたほとけとそ仰らける、しかれ」とも、その性たけくして、なを犯人をハ、或ハ」むまふねをかつけ、或ハほたしをうち、或ハし」はり、或ハ筒をかけなとして、いましめをき」けり、よに心えぬわさにてそありける、下國」の後、不審なる事ともを、状をもてたつね申」けれハ、上人の御返事云、よろこひてうけ給」候ぬ、まことに其後おほつかなく候つるに、うれ」しく仰られて候、但念佛の文かきてまいらせ候、」念佛の行ハ、かの佛の本願の行にて候、持戒」誦經誦呪理觀不の行ハ、

かの佛の本願に」あらぬをこなひにて候へハ、極樂をねかハん人」ハ、まつかならす本願の念佛の行をつとめて」のうへに、もしことをこなひをも、念佛にし」くはへ候ハむと思候ハゝ、さもつかまつり候、又、」たゝ、本願の念佛ハかりにても候へし、善導」和尚ハ阿弥陁佛の化身にておはしまし候へハ、」それこそハ、一定にて候へ、と申候に候、孝養の行」も佛の本願にあらす、たえんにしたかひて、」つとめさせおハしますへく候、又あかゝねの」阿字の事も、錫杖の事も、佛の本願に」あらぬつとめにて候、とてもかくても候なん、又、」迎攝の昜荼羅ハ大切におはしまし候、それも」つきの事に候、たゝ、念佛を三万、もしハ五万、」もしハ六万、一心に申させおハしまし候はむ」そ、決定往生のをこなひにてハ候、こと善根」ハ、念佛のいとまあらハの事に候、六万反を」たに、一心に申させ給ハゝ、そのほかにハ、なに事」をかハ、せさせおハしますへき、まめやかに一心」に、三万、五万、念佛をつとめさせ給ハゝ、少ゝ」戒行やふれさせおハしまし候とも、往生ハ」それにより候ましき事に候、但、このなかに、」孝養の行ハ佛の本願にてハ候はねとも、」八十九にておハしまし候なり、あひかまへて」ことしなんとハ、まちまいらせさせおハしませ」かしと覚候、たゝ、ひとりたのみまいらせてお」ハしまし候なるに、かならす〳〵まちまいらせ」おハしますへく候也、五月二日、源空、武藏」國熊谷入道殿御返事、已上、取詮、」

蓮生「不背西方」を深く信ず

蓮生、関東下りには馬上さかさまに乗る

坂東の阿弥陀仏

蓮生の不審に答える上人の返事

但念仏の文

釈文

蓮生、行生坐臥「不背西方」の文を、深く信じけるにや、あからさまにも、西を後ろにせざりければ、京より関東へ下りける時も、鞍を逆様に置かせて、馬にも逆さまに乗りて、口を引かせけるとなん。されば蓮生、

浄土にも剛の者とや沙汰すらん
西に向かいて後ろ見せねば

とぞ詠じける。上人も、信心堅固なる念仏の行者の例には、常に思い出で給いて、「坂東の阿弥陀仏」とぞ仰せられける。然れども、その性猛くして、猶犯人をば、或は馬槽を被け、或は絆しを打ち、或は縛り、或は筒を掛けなどして、誡め置きけり。世に心得ぬ業にてぞありける。下国の後、不審なる事どもを、状をもて尋ね申しければ、上人の御返事に云く、「喜びて承り候いぬ。真に其の後覚束なく候いつるに、嬉しく仰せられて候。但念仏の文書きて参らせ候。念仏の行は、彼の仏の本願の行にて候。持戒・誦経・誦呪・理観等の行は、彼の仏の本願にあらぬ行ないにて候えば、極楽を願わん人は、まず必ず本願の念仏の行を勤めての上に、若し異行ないをも、念仏にし加え候わむと思い候わば、さ

善導は阿弥陀仏の化身

迎接曼陀羅

も仕り候。又、唯、本願の念仏ばかりにても候べし。善導和尚は阿弥陀仏の化身にておわしまし候えば、それこそは、一定にて候えと申し候に候。孝養の行も仏の本願にあらず。堪えんに従いて勤めさせおわしますべく候。又、銅の阿字の事も錫杖の事も、仏の本願にあらぬ勤めにて候。とても斯くても候いなん。又、迎接の曼陀羅は大切におわしまし候。それも次の事に候。唯、念仏を三万、若しは五万、若しは六万、一心に申させおわしまし候わむぞ、決定往生の行ないにては候。異善根は、念仏の暇あらばの事に候。六万遍をだに、一心に申させ給わば、その外には、何事をかは、せさせおわしますべき。忠実やかに一心に、三万、五万、念仏を勤めさせ給わば、少々戒行破れさせおわしまし候とも、往生はそれにより候まじき事に候。但し、この中に、孝養の行は仏の本願にては候わねども、八十九にておわしまし候なり。相構えて今年等は、待ち参らせさせおわしませかしと覚え候。唯、一人馮み参らせておわしまし候なるに、必ず必ず待ち参らせおわしますべく候也。五月二日、源空。武蔵国熊谷入道殿御返事」（已上、詮を取る）。

〔第四段〕　詞書

蓮生か往生うたかひあるましきよし、或ハ」佛の告をかうふり、或ハ不思議の奇瑞とも」の侍けるを、上人に申入ける事、かくれなかりけ」れハ、月輪の禪定殿下きこしめされて、上人に」尋申されける御文云、熊江の入道往生をとけ」すといへとも、不思議の奇瑞ハ、ひとつにあらさる」よし、天下にあまねくかたらひうたふ事、もし」実ならハ、寂前に告仰らるへきところに、今まて」無音候、尤不審也、弥陁利物、末法偏増の證、」たゝ、かくのことき事にあるか、随喜感涙、」たとへをとるに物なし、この事を告給さる條、」もしこれ一向欣求にあらさるよし、御疑のある」か、ねかふ心さしのあさゝふかさは、たゝ、阿弥陁如來」の知見にまかせたてまつるものなり、但、宿障」深重のゆへに、至誠心こそ術なく候へ、信」仰欣求の條ハ、このころ假名新發ハのなか」にハ、あなかちに恐思給へからさるものか、いかん〳〵、」來六七日のあひた、かならす見參をとけむ、」とおもふ、申合へき事ハある故也、敬白、四月一日、」法然御房、已上、取詮、礼紙云、かの入道のまいらする状、」正文を給て、一見を加へんとおもふ、轉写の本の」文字たゝしからすして、よまれさるところあり、」比挍すへきものなり、事の次才殆たくひすく」なし、正しく往生をとけたらんにハ、超過畢」ぬ、

貴へし、信へし、凡左右にあたはさるもの也、」宿善のいたり、申てあまりあり、その子息の」會尺、又以珎重、一〻の事、皆以不思議の」境界なり、なを、感涙禁しかたきか、承及に」したかひて馳申ところ也、御返報の趣、その」草あらハ、一見の心さしあり、いかん、已上、取詮、上人、」熊谷の入道につかハされける御返事云、この」條こそ、とかく申に及ハす目出候へ、往生せさ」せ給たらんには、すくれて覚候、死期しり」て往生する人〳〵ハ、入道殿にかきらす多候、」かやうに耳目おとろかす事ハ、末代にハよも」候ハし、むかしも道綽禪師はかりこそ、おハし」まし候へ、返〻も申ハかりなく候、但、何事につ」けても、佛道にハ魔事と申事のゆ〻しき」大事にて候也、よく〳〵御用心候へき也、加樣に」不思議をしめすにつけても、たよりを伺事」も候ぬへき也、目出候にしたかひて、いたハしく」覚させ給て、加樣に申候也、よく〳〵御つ〻しみ」候て、佛にもいのりまいらせさせ給へく候、いつか」御のほり候へき、かまへて〳〵、のほらせおはし」ませかし、京の人〳〵おほやうハ、ミな信して」念佛をもいますこしいさみあひて候、これに」つけても、いよ〳〵す〻ませ給へく候、あしさま」に思食へからす、なを〳〵目出候、あなかしこ〳〵、」四月三日、源空、熊谷入道殿、已上、取詮、」

蓮生かねて奇瑞を感ず、月輪殿、上人へ尋ねられたる時の御返状

釈文

蓮生が往生疑いあるまじき由、或は仏の告げを被り、或は不思議の奇瑞どもの侍りけるを上人に申し入れける事、隠れなかりければ、月輪の禅定殿下聞し召されて、上人に尋ね申されける御文に云く、「熊谷の入道、往生遂げずと雖も、不思議の奇瑞等、一つにあらざる由、天下に遍く語らい謳う事、若し実ならば、最前に告げ仰せらるべき所に、今まで無音候、尤も不審也。弥陀利物、末法偏増の証、唯、斯くの如きの事にあるか。随喜感涙、譬えを取るに物なし。この事を告げ給わざる条、若しこれ一向欣求にあらざる由、御疑いのあるか。願う志の浅さ深さは、唯、阿弥陀如来の知見に任せ奉るものなり。但し、宿障深重の故に、至誠心こそ術なく候え。信仰欣求の条は、この頃仮名新発等の中には、強ちに恐れ思い給うべからざるものか、如何如何。来る六、七日の間必ず見参を遂げんと思う。申し合わすべき事等ある故也。敬白。四月一日、法然御房」(已上、詮を取る)。礼紙に云く、「彼の入道参らする状、正文を給いて、一見を加えんと思う。転写の本の文字正しからずして、読まれざる所あり、比校すべきものなり。事の次第、殆ど類少なし。正しく往生を遂げたらんには、超

熊谷の入道に遣わされた御返事

過畢んぬ。貴ぶべし、信ずべし。凡 左右に能わざるもの也。宿 善の至り、申して余りあり。その子息の会釈、又もって珍重、一々の事、皆もって不思議の境界なり、猶、感涙禁じ難きか。承り及ぶに従いて馳せ申す所 也。御返報の趣、その草あらば、一見の志 あり、如何」(已上、詮を取る)。上人、熊谷の入道に遣わされける御返事に云く、「この条こそ、兎角申すに及ばず目出たく候へ。往生せさせ給いたらんには、優れて覚え候。死期知りて往生する人々は、入道殿に限らず多く候。斯様に耳目驚かす事は、末代にはよも候わじ。昔も道綽 禅師ばかりこそ、おわしまし候へ。返す返すも申すばかりなく候。但し、何事に就けても、仏道には魔事と申す事の由々しき大事にて候 也。能く能く御用心候 べき也。斯様に不思議を示すに就けても、便りを伺う事も候いぬべき也。目出たく候 に従いて、労しく覚えさせ給いて、斯様に申し候 也。能く能く御慎み候いて、仏にも祈り参らせさせ給うべく候。何時か御上り候 べき。構えて構えて、上らせおわしませかし。京の人々大様は、皆信じて念仏をも今少し勇み合いて候。これに就けても、愈々勧ませ給うべく候。悪しざまに思 食すべからず、猶々目出たく候。あなかしこあなかしこ。四月三日、源空。熊谷入 道殿」(已上、詮を取る)。

〔第五段〕　詞書

建永元年八月に、蓮生ハ明年二月八日、往」生すへし、申ところもし不審あらん人ハ、き」たりて見へきよし、武藏國村岡の市に」札を立させけり、つたへきくともから、遠近」をわかす、熊谷か宿所へ群集する事、いく」千万といふ事をしらす、ゝてに其日になり」にけれハ、蓮生未明に沐浴して、礼盤にのほ」りて、高聲念佛躰をせむる事、たとへを」とるにものなし、諸人目をすますところに、しは」らくありて、念佛をとゝめ、目をひらきて、今」日の往生ハ延引せり、來九月四日、かならす」本意を遂へし、その日、來臨あるへし、と申」けれハ、群集の輩あさけりをなしてかへり」ぬ、妻子眷属、面目なきわさなりと歎けれは、」弥陁如來の御告によりて、來九月をちきる」ところなり、またくわたくしのハからひにあらす、」とそ申ける、さる程に、光陰ほとなくうつ」りて、春夏もすきにけり、八月のすゑにいさゝ」かなやむ事ありけるか、九月一日、そらに」音樂をきゝてのち、更に苦痛なく、身心安」樂なり、四日の後夜に沐浴して、やうやく」臨終の用意をなす、諸人、また、群集する」事、さかりなる市のことし、すてに巳刻にいた」るに、上人、弥陁來迎の三尊、化佛菩薩の」形像を一鋪に畠絵せられて、秘藏し給ける」を、蓮生、洛陽より武州へ下けるとき、

給はり」たりけるを懸たてまつりて、端坐合掌し、」高聲念佛熾盛にして、念佛と、もに息と」とまるとき、口よりひかりをハなつ、なかさ五六」寸ハかりなり、紫雲靉靆として、音樂髣髴」たり、吴香芬郁し、大地震動す、奇瑞連」綿として、五日の卯時にいたる、翌日、子刻に」入棺のとき、又吴香音ふふの瑞、さきのことし、」卯时にいたりて、紫雲にしよりきたりて家の」うへにとゝまる事、一时あまりありて、西を」さしてさりぬ、これらの瑞相ふ、遺言にまかせ」て、聖覚法印のもとへしるしをくりけり、」往生の霊吴、すこふる比類まれなる事に」なん侍けれは、まことに上品上生の往生、」うたかひなしとそ申あひける、」

蓮生、建永二年二月八日に、往生する旨、立札を立て予告する

蓮生、往生を延引

釈文

建永元年八月に、「蓮生は明年二月八日、往生すべし。申す所若し不審あらん人は、来りて見るべき」由、武蔵国村岡の市に札を立てさせけり。伝え聞く輩、遠近を分かず、熊谷が宿所へ群集する事、幾千万という事を知らず。既にその日になりにければ、蓮生未明に沐浴して、礼盤に登りて、高声念仏体を責むる事、譬えを取るに物なし。諸人目を澄ます所に、暫く在りて念仏を止め、目を開きて、「今日の往生は延引せり。来る九月四日、必ず本意を遂ぐべし。その

弥陀の告により死期を九月とし、大往生する

日、来臨あるべし」と申しければ、群集の輩、嘲りをなして帰りぬ。妻子眷属、「面目なき業なり」と歎きければ、「弥陀如来の御告げによりて、来る九月を契る所なり。まったく私の計らいにあらず」とぞ申しける。さる程に、光陰程なく移りて、春夏も過ぎにけり。八月の末に聊か悩む事ありけるが、九月一日、空に音楽を聞きて後、更に苦痛なく、身心安楽なり。四日の後夜に沐浴して、漸く臨終の用意を為す。諸人、又、群集する事、盛りなる市の如し。既に巳刻に至るに、上人、弥陀来迎の三尊、化仏・菩薩の形像を一舗に図絵せられて、秘蔵し給いけるを、蓮生、洛陽より武州へ下りける時、賜りたりけるを懸け奉りて、端坐合掌し、高声念仏熾盛にして、念仏と共に息止まる時、口より光を放つ。長さ五、六寸ばかりなり。紫雲靉靆として、音楽髣髴たり。異香芬郁し、大地震動す。奇瑞連綿として、五日の卯時に至る。翌日、子刻に入棺の時、又、異香・音楽等の瑞、前の如し。卯時に至りて、紫雲西より来りて、家の上に留まる事、一時余りありて、西を指して去りぬ。これらの瑞相等、遺言に任せて、聖覚法印の許へ記し送りけり。往生の霊異、頗る比類稀なる事になん侍りければ、「真に上品上生の往生、疑いなし」とぞ申し合いける。

〔奥書〕

廿七巻析帋数廿六丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第二十八巻

〔第一段〕　詞書

武藏國の御家人、津の戸の三郎為守」ハ、生年十八歳にして、治承四年八月に」幕下将軍（于時兵衛佐）石橋の合戰のとき、武」藏國より馳まいりてのち、安房國へ越給」しにもおなしくあひしたかひ、處ゝの」合戰に忠をいたし、名をあけすといふこ」となし、建久六年二月、東大寺供養のため」に、幕下上洛の事ありき、為守生年三十」三にて供奉したりけるか、三月四日入洛」し、同廿一日上人の庵室にまいりて、合戰度ゝ」のつミを懺悔し、念佛往生の道をうけた」まハりてのちハ、但信稱名の行者となりに」けれハ、本國にくたりても、をこたりなか」りけるに、ある人、熊谷の入道、津戸の三郎」ハ無智のものにて、余行かなひかたけれは」こそ、念佛はかりをはすゝめ給らめ、有智」の人にハ、かならすしも念佛にハかきる」へからすと申けるを、為守つたえきゝて、」上人にたつね申けるついてに、条ゝの不」審を申いれけり、上人の御返事云、」

一　熊谷の入道、津戸の三郎は、無智のものなれ」ハこそ但念佛をハすゝめたれ、有

智の人にハ」かならすしも念佛にハかきるへからすと申」よし、きこえてさふらふらむ、極たるひか事」に候、そのゆへハ、念佛の行は、もとより有智」無智にかきらす、弥陁のむかしちかひ給し」本願も、あまねく一切衆生のためなり、無」智のためにハ念仏を願し、有智のためには」余のふかき行を願し給ふことなし、十方衆」生の句に、ひろく有智無智、有罪無罪、善」人悪人、持戒破戒、かしこきもいやしきも、」乃至、みなこもれるなり、されハ、往生のみちを」とひたつね候人にハ、有智無智を論せす、みな」念佛の行はかりを申候也、しかるにそら事」をかまへて、さやうに念仏を申と、めむと」するものハ、さきのよに念仏三昧、浄土の法門」をきかす、のちの世に、また三悪道へかへるへ」きもの、しかるへくて、さやうの事をハたくみ」申ことにて候なり、そのよし聖教に見えて候、」見有修行起瞋毒、方便破壊競生怨、如此」生盲闡提輩、毀滅頓教永沈淪、超過大地」微塵刧、未可得離三途身と申たるなり、」この文の心ハ、浄土をねかひ念仏を行する」ものを見てハ、いかりをおこし、毒心をふくミ」て、はかりことをめくらし、やう〳〵の方便をなして、」念佛の行をやふりて、あらそひてあたをな」し、これをと、めむとするなり、かくのことき」のひとハ、むまれてよりこのかた、仏法の眼しゐ」て佛の種をうしなへる闡提のともから」なり、みたの名号をとなへて、なかき生死

を」たちまちにきりて、常住の極樂に往生す、」といふ頓教の御のりをそしりほろほして、」この罪によりて、三悪道にしつみて、大地」微塵刧をすくとも、なかく三悪道の身」をはなるへからす、といへるなり、されハ、さやう」にそら事をたくみて申候らん人をは、」かへりてあはれむへきなり、さほとのものゝ」申さむにより て、念佛にうたかひをなし、不」信をおこさんものハ、いふにたらぬ程の事」にてこそハ候はめ、おほかた弥陁に縁あさく」往生に时いたらぬものハ、きけとも信せす、」をこなふをみてははらをたて、いかりを」ふくみて、さまたけむとすることにて候なり、」その心をえて、いかに人申とも、御心はかりハ」ゆるかせ給へからす、あなかちに信せさらむは、」佛猶ちからをよひ給まし、いかにいはむや、凡」夫のちから及候ましき事なり、かゝる不信の衆」生を、利益せむとをもはむにつけても、とく」極樂へまいりて、さとりをひらきて生死にかへ」りて、誹謗不信のものをもわたして、一切衆生、」あまねく利益せむとおもふへき事にて」候也、」

一、念佛を申させ給ハむにハ、心をつねにかけ」て、口にわすれすとなふるか、めてたきことに」て候なり、たとひ、身もきたなく口もき」たなくとも、心をきよくして申させ給ハ」む事、返〻神妙候、ひまなくさやうに申さ」せ給らむこそ、返〻めてたく候へ、いかならむ」ときなりとも、わすれすして申させ給ハゝ、」往生の業

にかならすなり候はむする也、」いかなる时にも、申されさらむをこそ、ね」んして申はやとおもひ候へきに、申されんを」ねむして、申させ給はぬことハいかてか候へき、たゝいかなるをりもきらハす申させ給へし、」

一、あらぬ行、ことさとりの人にむかひて、いたく」しゐておほせらるゝこと候まし、異解吴学の」人をみては、これを恭敬して、かるしめあな」つる事なかれ、と申たることにて候也、阿彌陀仏に縁なく、極楽浄土にちきりすくなから」ん人の、信もおこらす、ねかハしくもなからん」にハ、ちからをよはす、たゝ、心にまかせて、いかなる」をこなひをもして、後生たすかりて、三悪道を」はなるゝことを、人の心にしたかひてすゝめ候へ」きなり、又、ちりはかりもかなひぬへからん人には、」阿弥陀佛をすゝめ、極楽をねかハすへきにて」候そ、いかに申すとも、このよの人の、念仏に」あらてハ、極楽にむまれて、生死をはなるゝ」事ハ候ましきなり、もしハそしり、もしは信せ」さらむものをは、こはからてこしらふへきにて」候なり、已上、取詮、この御返事を給てのちハ、いよ〳〵」念仏の外他事なかりけるを見うらやみて、専」修念佛の行人、かの國中に三十余人まてに」なりにけれハ、このよしを上人へ申いれけるに、」上人御返事云、専修念仏の人ハ、よにありかたく」候に、その一國に三十余人まて候らんこそ、ま」めやかにあはれに候へ、京邊なとの、つね

にきゝ」ならひ、かたハらをも見ならひ候ぬへき所にて」候にたにも、おもひきりて専修念仏する人ハ、あり」かたきことにて候、道綽禅師の平州と申候所」こそ、一向念仏の地にてハ候しか、専修念仏三十」余人ハよにありかたく覚候、これひとへに御ち」から、又、熊谷の入道なとのゆへにてこそ候なれ、そ」れも時のいたりて、往生すへき人の多候へき」ゆへにこそ候らめ、縁なきことハ、わさと人のすゝ」め候にたにも、かなはぬことにて候へハ、まして子細も」しらせ給ハぬ人なとの、仰られむによるへき事」にても候はぬに、もとより機縁純熟して、時いた」りたることにて候へハこそ、さほと専修の人なむと」は候らめと、をしハかられ候、念仏往生の誓願ハ、平等」の慈悲に住して發給たる事なれハ、人をきら」ふことハさふらはぬなり、仏の御心ハ慈悲をもて」躰とすることにて候なり、されハ観無量壽經ニ」ハ、仏心といふハ大慈悲これなりととかれて候、善導」和尚、この文をうけてこの平等の慈悲をもてハ、」あまねく一切を攝すと尺し給へり、一切の言ひろく」して、もるゝ人候へからす、されハ、念仏往生の願ハ、これ」弥陀如来の本地の誓願なり、余の種〻の行ハ、」本地のちかひにあらす、尺迦も世に出給事ハ、」弥陀の本願をとかむと思食御心にて候へとも、衆生の」機縁にしたかひ給ふ日ハ、余の種〻の行をも説」たまふはこれ随機ののりなり、仏のみつからの御心」のそこには

候ハす、されハ、念仏は弥陁にも利生の本願、釈迦にも出世の本懐なり、余の種々の行にハ」似す候也、已上、取詮、この仰をうけたまはりしのちハ、ます〳〵」いさミをなし、念仏の外他事なかりき、」

釈文

武蔵国御家人津戸の三郎為守

武蔵国の御家人、津戸の三郎為守は、生年十八歳にして、治承四年八月に幕下将軍（時に兵衛佐）石橋の合戦の時、武蔵国より馳せ参りて後、安房国へ越え給いしにも同じく相従い、処々の合戦に忠を致し、名を挙げずという事なし。建久六年二月、東大寺供養の為に、幕下上洛の事ありき。為守生年三十三にて供奉したりけるが、三月四日入洛し、同二十一日上人の庵室に参りて、合戦度々の罪を懺悔し、念仏往生の道を承りて後は、但信称名の行者となりにければ、本国に下りても、怠りなかりけるに、或る人、「熊谷の入道、津戸の三郎は無智の者にて、余行叶い難ければこそ、念仏ばかりをば勧め給うらめ。有智の人には、必ずしも念仏には限るべからず」と申しけるを、為守伝え聞きて、上人に尋ね事しけるついでに、条々の不審を申し入れけり。上人の御返事に云く、

但信称名の行者となる

為守、種々の疑を法然上人に尋ねる

上人の御返事

「一、熊谷の入道、津戸の三郎は、無智の者なればこそ但念仏をば勧めたれ。有

念仏の行は、有智無智に限らず

有智の為には余の深き行を願じ給う事なし

法事讃

智の人には、必ずしも念仏には限るべからずと申す由、聞こえて候らむ。極めたる僻事に候。その故は、念仏の行は、元より有智・無智に限らず、弥陀の昔誓い給いし本願も、遍く一切衆生の為なり。無智の為には念仏を願じ、有智の為には余の深き行を願じ給う事なし。十方衆生の句に、広く有智・無智、有罪・無罪、善人・悪人、持戒・破戒、賢きも賤しきも、乃至、皆籠れるなり。されば、往生の道を問い尋ね候人には、有智・無智を論ぜず、皆念仏の行ばかりを申し候也。然るに虚事を構えて、左様に念仏を申し止めむとする者は、前の世に念仏三昧、浄土の法門を聞かず、後の世に、又、三悪道へ帰るべき者の然るべくて、左様の事をば巧み申す事にて候なり。その由、聖教に見えて候。「修行有るを見て瞋毒を起こし、方便破壊して競いて怨みを生ず。此の如き生盲闡提の輩、頓教を毀滅して永く沈淪し、大地微塵劫を超過すとも、未だ三途の身を離るることを得べからず」と申したるなり。この文の心は、浄土を願い念仏を行ずる者を見ては、怒りを起こし、毒心を含みて謀を廻らし、様々の方便を成して、念仏の行を破りて、争いて仇を成し、これを止めむとするなり。斯くの如きの人は、生まれてより此の方、仏法の眼しいて仏の種を失える闡提の輩なり。弥陀の名号を唱えて、長き生死を忽ちに切りて、

念仏は、心を常に掛けて、口に忘れず唱うるが、目出度き事

常住の極楽に往生すという頓教の御法を謗り滅ぼして、この罪によりて、三悪道に沈みて、大地微塵劫を過ぐとも、永く三悪道の身を離るべからず、といえるなり。されば、左様に虚事を巧みて申し候らん人をば、却りて哀れむべきなり。さ程の者の申さむによりて、念仏に疑いを為し、不信を起こさん者は、言うに足らぬ程の事にてこそは候わめ。大方弥陀に縁浅く往生に時至らぬ者は、聞けども信ぜず、行なうを見ては腹を立て、怒りを含みて、妨げむとする事にて候なり。その心を得て如何に人申すとも、御心ばかりは忽せ給うべからず。強ちに信ぜざらむは、仏猶力及び給うまじ。如何に況や、凡夫の力及び候まじき事なり。斯かる不信の衆生を利益せむと思わむに就けても、疾く極楽へ参りて、悟りを開きて生死に還りて、誹謗不信の者をも渡して、一切衆生、遍く利益せむと思うべき事にて候也。

一、念仏を申させ給わむには、心を常に掛けて口に忘れず唱うるが、目出度き事にて候なり。仮令、身も穢く口も穢くとも、心を浄くして申させ給わむ事、返す返す神妙に候。隙なく左様に申させ給わらむこそ、返す返す目出度く候え。如何ならむ時なりとも、忘れずして申させ給わば、往生の業に必ずなり候わむずる也。如何なる時にも、申されざらむをこそ、念じて申さばやと思い

異解異学の人を見ては、これを恭敬し、軽しめ、侮ることなかれ

為守、専修念仏者三十余人になった由を法然に伝えたときの返事

候べきに、申されんを、念じて申させ給わぬ事はいかでか候べき。唯、如何なる折も嫌わず、申させ給うべし。

一、あらぬ行、異悟りの人に向かいて、甚く強いて仰せらるる事候まじ。異解・異学の人を見ては、これを恭敬して、軽しめ侮る事なかれと申したる事にて候也。阿弥陀仏に縁なく、極楽浄土に契り少からん人の、信も起こらず、願わしくもなからんには、力及ばず。唯、心に任せて、如何なる行ないをもして、後生助かりて、三悪道を離るる事を、人の心に従いて勧め候べきなり。又、塵ばかりも叶いぬべからん人には、阿弥陀仏を勧め、極楽を願わすべきにて候ぞ。如何に申すとも、この世の人の、念仏にあらでは、極楽に生まれて、生死を離るる事は候まじきなり。若しは謗り、若しは信ぜざらむ者をば、こわがらでこしらうべきにて候なり（已上、詮を取る）。この御返事を給いて後は、愈々念仏の外他事なかりけるを見羨みて、専修念仏の行人、彼の国中に三十余人までになりにければ、この由を上人へ申し入れけるに、上人御返事に云く、専修念仏の人は、世に有難く候に、その一国に三十余人まで候らんこそ、忠実やかに哀れに候え。京辺り等の、常に聞き習い、傍らをも見習い候いぬべき所にて候にだにも、思い切りて専修念仏する人は、有難

念仏往生の誓願は、平等の慈悲に住して発したまえる願

釈迦も世に出で給う事は、弥陀の本願を説かんと思食す御心

き事にて候。道綽禅師の平州と申し候所こそ、一向念仏の地にては候いしか。専修念仏三十余人は世に有難く覚え候。これ偏に御力、又、熊谷の入道などの故にてこそ候なれ。それも時の至りて、往生すべき人の多く候べき故にこそ候らめ。縁なき事は、態と人の勧め候にだにも、叶わぬ事にて候えば、況して子細も知らせ給わぬ人等の、仰せられむによるべき事にても候わぬに、元より機縁純熟して、時至りたる事にて候えばこそ、さ程専修の人等は候らめと、推し量られ候。念仏往生の誓願は、平等の慈悲に住して発し給いたる事なれば、人を嫌う事は候わぬなり。仏の御心は、慈悲をもて体とする事にて候なり。されば『観無量寿経』には、「仏心というは、大慈悲これなり」と説かれて候。善導和尚、この文を受けて、「この平等の慈悲をもては、遍く一切を摂す」と釈し給えり。一切の言広くして、漏るる人候べからず。されば、念仏往生の願は、これ弥陀如来の本地の誓願なり。余の種々の行は、本地の誓いにあらず。釈迦も世に出で給う事は、弥陀の本願を説かむと思食す御心にて候えども、衆生の機縁に従い給う日は、余の種々の行をも説き給うは、これ随機の法なり。仏の自らの御心の底には候わず。されば、念仏は弥陀にも利生の本願、釈迦にも出世の本懐なり。余の種々の行には似ず候

也」（已上、詮を取る）。この仰せを承りし後は、益々勇みを成し、念仏の外他事なかりき。

〔第二段〕　詞書

津の戸の三郎、上人の門才浄勝房、唯願房」等の僧衆、少ゝ申くたして、念仏の先達と」して、不断念仏をはしめおこなひけるを、為守」聖道の諸宗を謗し、専修念仏を興するよし、」元久二年の秋のころ、征夷将軍右大臣実朝公に」あらぬさまに讒し申ものありて、召尋らるへ」きよしきこえけれは、為守おとろきて、も」しさる事あらハ、いかゝ申上候へき、難答の詞、」假令の樣を、假名真名にくハしくしるし給へき」むね、飛脚をもて、上人に申入たりけれハ、上人」御返事云、念佛のこと、いまたくハしくならハせ給」はぬことにて候へハ、専修雑修の間の事ハ、くハし」き沙汰候はすとも、召とハれ候ハゝ、法門の委事」ハしり候はす、御京上の时うけたまはりわたりて、」聖のもとへまかり候て、後世の事をは、いかゝし候へき、」在家のものなとの、後生たすかり候ぬへきことハ、」なに事か候らんと問候しかハ、ひしりの申候し」やうハ、生死をはなるゝみちはやう〳〵に多候へ」とも、そのなかに極楽に往生する、これ仏の」衆生をすゝめて、生死をいたさせ給ふ一の道」なり、しかるに、極楽に往生する

行、又、やう〳〵に多」候へとも、そのなかに、念仏ハこれ弥陁の一切」衆生のために、みつからちかひ給たりし本願の」行なれは、往生の業にとりてハ、念仏にしくハ」なし、往生せむとおもはゝ、念仏をこそハせめと申」候き、何況、又、在家のものゝ法門をもしらす、智」恵もなか覧ものハ、念仏の外にハ、なに事を」して往生すへし、といふことなし、わかをさなく」より、法門をならひたるものにてあるたにも、念仏」よりほかに、又、なにことをして往生すへしとも」おほえねハ、たゝ、念仏はかりをして、弥陁の本願」をたのミて、往生せむとおもひてあるなり、まして」在家の者なとハ、なに事かあらむと申候しかハ、」ふかくそのよしをたのミ候て、念仏をつかまつり候」なり、又、この念仏を申ことハ、たゝわか心より」弥陁本願の行なりと、さとりて申事にも」あらす、唐のよに、善導和尚と申候し人の、往生」の行業にをいてハ、専修雑修と申二の行を」わかちて、すゝめ給へるなり、専修といふハ、念仏也、」雑修といふは、念仏の外の行なり、専修のものハ、」百人ハ百人なから往生し、雑修のものハ、千人か中」にわつかに一、二人ありといへるなり、唐土に又、信」中と申もの、このむねをしるして、専修浄業文」といふ文をつくりて、唐土の諸人をすゝめたり、」専修について、五種の専修正行といふ事あり、」この五種の正行について、又、正助二行をわ」かてり、正業といふは、五種の中の才四の念」仏なり、

助業といふハ、そのほかの四の行なり、い」ま決定して浄土に往生せむと思ハゝ、専雑二」修のなかには、専修のおしへによりて、一向に念」仏すへし、正助二業の中には、正業のすゝめに」よりて、ふた心なく、たゝ才四の稱名念仏をすへし」と申候しかは、くハしきむね、ふかき心をはしり」候はす、さてハ、念仏ハめてたき事にこそあむ」なれと信して、申候はかりに候、件の善導和尚」と申人ハ、うちある人にもさふらはす、阿弥陀仏」の化身にてをハしまし候なれハ、おしへすゝめさせ」給はん事、よもひかことにてハ候ハしと、ふかく」信しまいらせて、念仏はつかまつり候なり、そのつ」くらせ給て候なる文とも多候なれとも、文字」もしり候はぬものにて候へハ、たゝ、心はかりを聞」候て、後生やたすかり候、往生やし候とて、申候程ニ、」ちかきものとも、見うらやみ候て、少ゝ申ものとも」候也と、これらほとに申させ給へし、なか〳〵くハ」しく申させ給ハゝ、あやまちもありなんとして、」あしき事もこそ候へ、やう〳〵に難答をしるし」てと候へとも、时にのそみてハ、いかなる詞ともか」候はんすらむに、かきてまいらせて候ハむも、あしく」さふらひぬへく候、たゝ、よく〳〵御はからひ候て、早晩」よきやうにこそ、ハからハせ給はめ、又、念仏申へ」からすと仰られて候とも、往生に心さしあらむ人」は、それにより候まし、念仏いよ〳〵申せと仰ら」れ候とも、道心なからむものハ、それにより候まし、と」かくにつ

けて、いたく思食事候まし、いかならむに」つけても、このたひ往生しなむと、人をハしらす、」御身にかきりてハ思食へし、殿ハ道理ふかくし」りて、ひか事ハおハしまさぬことにて候と申あひ」て候へハ、これらほとに聞食さんに、念仏ひか事」にてありけり、いまハ、な申そと仰らるゝことハ、よも」候ハし、さらさらむ人ハ、いかに申ともおもふとも、」無益の事にてこそ候はむすれ、（已上、取詮、）しかるに、翌」年四月廿五日に、信濃前司（于時山城民？大夫）行光か奉」行にてくたさるゝ御教書云、津戸郷内建立念」佛所、令居住一向専修輩之由、所聞食也、彼宗」之子細為有御尋、為宗之輩一両人、早可被召」進之状、依仰執達如件（云々）、仍、同月廿八日に、浄勝房」唯願房等の、念仏者をあひ具して、法花堂の」まへの、二棟の御所と号する、南向の廣廂に參」候す、重々の御たつねにつきて、津戸三郎ハ、上人」御返事の趣をそらにうかへて用意したる事」なれハ、とゝこほりなく申いれけるに、浄勝房ハ」の念仏者ハ、年來所学の道なれハ、法蔵比丘因位」のむかしより、弥陁如来成仏のいまにいたるまて、」凡夫往生のみちくらからす述申けれハ、面々に」立申むね、こと〳〵く聞食ひらかれけるによりて、」専修の行においてハ、しさいあるへからす、もとのことく」つとめ行へきよし、仰出されしのちハ、いよ〳〵念仏」の行をこたりなかりしかハ、建保七年正月、右府」薨逝のとき、二品禅尼の御はからひとして、かの」御骨をこのところにわたし

たてまつられけれハ、」ひとへにかの御菩提をそとふらひ申ける、」

為守、不断念仏を行う

将軍より専修の旨を召し尋ねられる由、為守が上人へ申し、委しき返事を得る

釈文

津戸の三郎、上人の門弟浄勝房・唯願房等の僧衆、少々申し下して、念仏の先達として、不断念仏を始め行ないけるを、為守聖道の諸宗を謗じ、専修念仏を興ずる由、元久二年の秋の頃、征夷将軍（右大臣実朝公）にあらぬ様に讒じ申す者ありて、召し尋ねらるべき由聞こえければ、為守驚きて、「若しさる事あらば、如何申し上げ候べき。難答の詞、仮令の様を、仮名・真名に詳しく記し給うべき」旨、飛脚をもて、上人に申し入れたりければ、上人の御返事に云く、念仏の事、未だ詳しく習わせ給わぬ事にて候えば、専修・雑修の間の事は、詳しき沙汰候わずとも、召し問われ候わば、「法門の委しき事は知り候わず。御京上りの時承り渡りて、聖の許へ罷り候いて、後世の事をば、如何し候べき。在家の者等の、後生助かり候いぬべき事は、何事か候らんと問い候いしかば、聖の申し候いし様は、生死を離るる道は、様々に多く候えども、その中に極楽に往生する、これ仏の、衆生を勧めて生死を出させ給う一つの道なり。然るに、極楽に往生する行、又、様々に多く候えども、その中に念仏はこれ弥陀の

念仏の外には何事をして往生すべしということなし

善導和尚、専修・雑修を勧める

信中、専修浄業文を作って、人々に勧める

五種正行を正助二行に分かつ

一切衆生の為に自ら誓い給いたりし本願の行なれば、往生の業にとりては、念仏に如くはなし。往生せむと思わば、念仏をこそはせめと申し候いき。何に況や、又、在家の者の法門をも知らず、智恵もなからん者は、念仏の外には、何事をして往生すべしという事なし。我が幼くより法門を習いたる者にてあるだにも、念仏より外に、又、何事をして往生すべしとも覚えねば、唯、念仏ばかりをして、弥陀の本願を憑みて、往生せむと思いてあるなり。況して在家の者等は、何事かあらむと申し候いしかば、深くその由を憑み候いて、念仏を仕り候なり。又、この念仏を申す事は、唯、我が心より弥陀本願の行なりと、悟りて申す事にもあらず。唐の世に、善導和尚と申し候いし人の往生の行業に於いては、専修・雑修と申す二つの行を分かちて、勧め給えるなり。専修というは、念仏也。雑修というは、念仏の外の行なり。専修の者は、百人は百人ながら往生し、雑修の者は、千人が中に僅かに一、二人ありと言えるなり。唐土に又、信中と申す者、この旨を記して、『専修浄業文』という文を作りて、唐土の諸人を勧めたり。専修に就いて、五種の専修正行という事あり。この五種の正行に就いて、又、正助二行を分かてり。正業というは、五種の中の第四の念仏なり。助業というは、その外の四の行なり。今決定して浄土に往生せむと思わば、専雑二修の中には、

善導和尚は阿弥陀仏の化身

専修の教えによりて、一向に念仏すべし。正助二業の中には、正業の勧めによりて、二心なく、唯、第四の称名念仏をすべしと申し候いしかば、詳しき旨、深き心をば知り候わず。さては、念仏は目出度き事にこそあむなれと信じて、申し候ばかりに候。件の善導和尚と申す人は、氏ある人にも候わず、阿弥陀仏の化身にておわしまし候なれば、教え勧めさせ給わん事、よも僻事にては候わじと、深く信じ参らせて、念仏は仕り候なり。その作らせ給いて候なる文ども多く候なれども、文字も知り候わぬ者にて候えば、唯、心ばかりを聞き候いて、後生や助かり候、往生やし候とて、申し候程に、近き者共、見羨み候いて、少々申す者共候也」と、これら程に申させ給うべし。中々詳しく申させ給わば、過ちもあり等して、悪しき事もこそ候え。様々に難答を記してと候えども、時に臨みては、如何なる詞どもか候わんずらむに、書きて参らせて候わむも悪しく候いぬべく候。唯、能く能く御計らい候いて、早晩良き様にこそ、計らわせ給わめ。又、念仏申すべからずと仰せられて候とも、往生に志あらむ人は、それにより候まじ。念仏愈々申せと仰せられ候とも、道心なからむ者は、それにより候まじ。兎角に就けて、甚く思食す事候まじ。如何ならむに就けても、この度往生しなむと、人をば知らず、御身に限りては思食すべし。殿は道理深

将軍御教書

為守、浄勝房、唯願房と二棟の御所に参候す

く知りて、僻事はおわしまさぬ事にて候と申し合いて候えば、これら程に聞し食さんに、「念仏僻事にてありけり。今は、な申しそ」と仰せらるる事は、よも候わじ。さらざらむ人は、如何に申すとも思うとも、無益の事にてこそ候わむずれ（已上、詮を取る）。然るに、翌年四月二十五日に、信濃前司（時に山城民部大夫）行光が奉行にて下さるる御教書に云く、「津戸の郷内に念仏所を建立し、一向専修の輩を居住せしむるの由、聞し食さる所なり。彼の宗の子細御尋ね有るが為に、宗の輩たるもの一両人、早く召し進めらるべきの状、仰せに依りて執達件の如し。云々」。仍りて、同月二十八日に、浄勝房・唯願房等の、念仏者を相具して、法華堂の前の、二棟の御所と号する、南向きの広廂に参候す。重々の御尋ねに就きて、津戸三郎は、上人御返事の趣を暗に浮かべて用意したる事なれば、滞りなく申し入れけるに、浄勝房等の念仏者は、年来所学の道なれば、法蔵比丘因位の昔より弥陀如来成仏の今に至るまで、凡夫往生の道暗からず述べ申しければ、面々に立て申す旨、悉く聞し食し開かれけるにより て、専修の行に於いては、子細あるべからず、元の如く勤め行なうべき由、仰せ出されし後は、愈々念仏の行怠りなかりしかば、建保七年正月、右府薨逝の時、二品禅尼の御計いとして、彼の御骨をこの所に渡し奉られければ、偏に彼の御

菩提をぞ弔い申しける。

〔第三段〕　詞書

為守ふかく上人の勧化を信し、ひとへに極楽の」往生をねかひて、ふた心なく念佛しけるか、おな」しくは出家の本意をとけはやと思けるに、」関東の免許なかりけれハ、在俗のかたちなから」法名をつき、戒をうけ、袈裟をたもつへき」よし、上人にのそミ申入けれは、その心さしをあ」はれみて、寛印供奉のかゝれたる戒本十重」禁の次才、ならひに上人抄記の三聚浄戒のむね」なとをしるしくたされ、又、袈裟をつかハし、尊願と」いふ法名をくたされけり、この御返事を給ハり」てのちは、ひとへに出家のをもひをなして念仏す、」又、そのゝち、上人所持の念珠を所望しける御返」事には、これ程に思食事ハ、この世ひとつのことに」ハあらす、さきのよのふかきちきりとあはれに」候、かまへて極楽にこのたひまいりあはせ給へし、」つねにもちて候すゝまいらせ候、御念仏おこたらす、」せさせおはしますへしと、云々、取詮、又、ある时の」御文には、このたひかまへて往生しなむと思食」きるへく候、うけかたき人身すてにうけたり、あ」ひかたき念佛往生の法門にあひたり、裟婆をい」とふ心あり、極楽をねかふ心をこりたり、弥陀の」本願ふかし、往生ハ御心にあるたひなり、ゆめ

〳〵」御念仏おこたらす、決定往生のよしを存せさせ」給へし、云々、これらの御文ともを、にしきの袋に」いれて、身をはなたさりけり、しかるへき事にや、」建保七年正月、右丞相實朝公薨逝のとき、免許」をかふりて出家をとけ、上人よりしるしくたさ」れける法名をつきて、尊願とそ申ける、上人」往生ののちは、日にしたかひて極楽のこひしく、年」をおひて穢土のいとハしく覚ける〻にハ、此御文」をとりいたし拝見しては、とくむかへさせ給へ、と」申けれとも、むなしく歳月を送けるあひた、」上人の門才浄勝房以下の僧衆をもて、仁治三」年十月廿八日より、三七日の如法念仏をハしめ、十一」月十八日結願の夜半に、道場にして高聲念」仏し、みつから腹をきりて五臓六腑をとりい」たし、練大口につつみて、しのひてうしろの河に」すてさせにけり、夜陰の事なれハ、人さらにこれ」をしらす、その〻ち、僧衆にむかひて、かやうに出家」籠居して、大臣殿の御ほたいをとふらひ申につけて」も、主君の御なこりもこひしくましますうへ、上人」も、極楽にかならすまいりあへ、と仰の侍しに、い」ま〻て往生せすして、穢土のすまゐ、かた〳〵無益也、」釋尊も八十の御入滅、上人も八十の御往生、尊願」又満八十なり、才十八は、念仏往生の願なり、今日又、」十八日なり、如法念仏の結願にあたりて、今日往生」したらむは、殊勝の事なるへし、なと申けれは、」か〻る用意とハおもひもよらす、只あらましの詞」と心

得て、まことにめてたくこそ候はめ、と返」答しけるに、その夜もあけ、十九日にもなりぬ、」敢て苦痛なし、只今臨終すへき心ちもなかり」けれハ、子息の民部大夫守朝をよひて、きりたる」はらをひきあけて、まろきもといふもの、のこりて、」臨終ののふるとおほゆるなり、よりて見よ、と申」ける時そ、はしめて人しりにける、心さきの程ニ」まろきもの、あるよしを申けれハ、手をいれてひき」きりて、なけすて、、これかのこれる故に、臨終ハの」ふるなるへし、とそ申ける、人〳〵おとろきあはて」けれは、娑婆のいとハしく、極楽のねかハしき心さし、」日にしたかひていやまさりなれハ、いま一日も」とくまいりたくて、かくはからひぬるよしをかきく」とき申けれハ、まことに願往生の心さしの熾盛なる」ありさま、みる人みな涙をなかさぬハなし、すこ」しきのいたみもなくて念仏しけるか、七日まて」のひけれハ、うかいの水のかよふゆへなるへしとて、」うかいをと、めて塗香を用けるか、気力も更」におとろへす、程なく疵も癒にける、のちにハ、時〳〵」行水を用けるとかや、正月一日にもなりにけれハ、」死せすしてハ、往生すへきみちなきゆへに、尊願ハ」正月一日の祝にハ、臨終の儀式をならして、とし」ひさしくなれり、日来のあらましたかハすして、今日」往生すへき故に延引しけるとよろこひて、しき」りに念仏しけれとも、その日もすき、次の日も」又くれぬ、只今臨終すへき心ちもなかりけれハ、」上人の

御文を又とりいたして、往生ののちハ思」出へきなり、かならす極楽にまいりあへと、自」筆の御文にのせられなから、いそきまいらむ」と心をつくし侍に、をそくむかへさせ給ことの、心」うく侍よし、連日になけき申けるか、正月十三日」の夜のゆめに、來十五日午刻に迎へきよし、上」人きたりてつけ給とみる、さめてこれをか」たり、歓𢘓のなみたをなかしけり、件の日に」なりにしかは、上人より給たる袈裟をかけ、念」珠をもちて西にむかひ、端坐合掌して高聲」念仏数百反をとなへ、午の正中に念仏とと」に息たえぬ、紫雲空にそひき、吴香室ニ」みつ、荼毗の庭にいたるまで、そのにほひな」をきえさりけり、腹をきりてのち、水漿をた」ちて五十七日、気力つねのことくしていたむ」所なく、つゐに往生をとけにける、不思議の」事なり、抑、いまのするところの自害往生、水」漿をたちてのち、五十余日をふること、殆信を」とりかたしといへとも、かの子孫、上人の御消息、」ならひに念珠袈裟等を相傳して、披露す」る事、世もてかくれなし、たゝこれ、尊願か不思議」の奇特をのするはかりなり、余人さらにこのミ」行せよとにハあらす、凡、上代上機の事ハしハ」らくこれをさしをく、末代當世の行者ハ機根」よはきゆへに、たとひ、思たつものありとも、その期」にのそみて、もし後悔の一念もおこりぬへし、」しからはなにの詮かあらむ、上人も、いけらハ念仏」の功つもり、しなハ往生うたかハす、とてもかくて」も、こ

の身には思ひわつらふ事そなき、と心得」て、ねんころに念仏して、畢命を期とせよと」こそ、禅勝房にハさつけられけれ、鎮西の」聖光房も、自害往生、焼身往生、入水往生、断」食往生等の事、末代にハ斟酌すへしと、いま」しめをかれけるとかや、ゆめ〳〵このミ行すへからす、」ふかく上人の勧化を信して、念ゝ相續早命」為期の行をつとむへきものなり、」

為守、在俗のまま、尊願という法名をうける

尊願、上人の数珠を所望、許さる

釈文

為守深く上人の勧化を信じ、偏に極楽の往生を願いて、二心なく念仏しけるが、同じくは出家の本意を遂げばやと思いけるに、関東の免許なかりければ、在俗の形ながら、法名をつき、戒を受け、袈裟を保つべき由、上人に望み申し入れければ、その志を哀れみて、寛印供奉の書かれたる戒本十重禁の次第、並びに上人抄記の三聚浄戒の旨等を記し下され、又、袈裟を遣わし、尊願という法名を下されけり。この御返事を給わりて後は、偏に出家の思いをなして念仏す。又、その後、上人所持の念珠を所望しける御返事には、「これ程に思食す事は、此の世一つの事にはあらず、先の世の深き契りと哀れに候。構えて極楽にこの度参り会わせ給うべし。常に持ちて候 数珠参らせ候。御念仏怠

上人の書状を身より離さず

為守、建保七年、許されて出家する

三七日の如法念仏

結願に、自ら腹を切りて、五臓六腑を取り出す

極楽に必ず参り遇え

らず、せさせおわしますべし」と、（云々、詮を取る）。又、或る時の御文には、「この度、構えて往生しなむと思食しきるべく候。受け難き人身既に受けたり。遇い難き念仏往生の法門に遇いたり。娑婆を厭う心あり、極楽を願う心起こりたり。弥陀の本願深し。往生は御心にある度なり。努々御念仏怠らず、決定往生の由を存ぜさせ給うべし」（云々）。これらの御文どもを、錦の袋に入れて身を離たざりけり。然るべき事にや、建保七年正月、右丞相（実朝公）薨逝の時、免許を被りて出家を遂げ、上人より記し下される法名をつきて、尊願とぞ申しける。上人往生の後は、日に従いて極楽の恋しく、年を追いて穢土の厭わしく覚えける儘には、此の御文を取り出し拝見しては、「疾く迎えさせ給え」と申しけれども、虚しく歳月を送りける間、上人の門弟浄勝房以下の僧衆をもて、仁治三年十月二十八日より、三七日の如法念仏を始め、十一月十八日結願の夜半に、道場にして高声念仏し、自ら腹を切りて五臓六腑を取り出し、練大口に包みて、忍びて後ろの河に捨てさせにけり。夜陰の事なれば、人更にこれを知らず。その後、僧衆に向かいて、「斯様に出家籠居して、大臣殿の御菩提を弔い申すに就けても、主君の御名残も恋しくまします上、上人も、極楽に必ず参り遇えと仰せの侍りしに、今まで往生せずして、穢土の住居、旁無益也。釈

尊も八十の御入滅、上人も八十の御往生、尊願又、満八十なり。第十八は、念仏往生の願なり。今日又、十八日なり。如法念仏の結願に当たりて、今日往生したらむは、殊勝の事なるべし」など申しければ、斯かる用意とは思いもよらず、只あらましの詞と心得て、「真に目出度くこそ候わめ」と返答しけるに、その夜も明け、十九日にもなりぬ。敢えて苦痛なし。只今臨終すべき心地もなかりければ、子息の民部大夫守朝を呼びて、切りたる腹を引き開けて、「丸肝という物の残りて、臨終の延ぶると覚ゆるなり。寄りて見よ」と申しける時ぞ、初めて人知りにける。心さきの程に丸き物のある由を申しければ、手を入れて引き切りて、投げ捨てて、「これが残れる故に、臨終は延ぶるなるべし」とぞ申しける。人々驚き慌てければ、娑婆の厭わしく、極楽の願わしき志、日に従いて弥増さりなれば、今一日も疾く参りたくて、斯く計らいぬる由を掻き口説き申しければ、真に願往生の志の熾盛なる有り様、見る人皆涙を流さぬはなし。少しきの痛みもなくて念仏しけるが、七日まで延びければ、嗽の水の通う故なるべしとて、嗽を止めて塗香を用いけるが、気力も更に衰えず、程なく疵も愈えにける、後には、時々行水を用いけるとかや。正月一日にもなりにければ、死せずしては、往生すべき道なき故に、尊願は正月一日の祝いには、臨終の儀式を慣らして、年

腹切りて後、水漿を断ちて五十七日、気力常の如く、痛む所なし

久しくなれり。日来のあらまし違わずして、今日往生すべき故に延引しけると喜びて、頻りに念仏しけれども、その日も過ぎ、次の日も又暮れぬ。只今臨終すべき心地もなかりければ、上人の御文を又取り出して、「往生の後は思い出すべきなり。必ず極楽に参り遇え」と自筆の御文に載せられながら、急ぎ参らむと心を尽くし侍るに、遅く迎えさせ給う事の、心憂く侍る由、連日に嘆き申しけるが、正月十三日の夜の夢に、来る十五日午刻に迎うべき由、上人来りて告げ給うと見る。覚めてこれを語り、歓喜の涙を流しけり。件の日になりにしかば、上人より賜いたる袈裟を掛け、念珠を持ちて西に向かい、端坐合掌して高声念仏数百遍を唱え、午の正中に念仏と共に息絶えぬ。紫雲空に聳き、異香室に満つ。荼毘の庭に至るまで、その匂い猶消えざりけり。腹を切りて後、水漿を断ちて五十七日、気力常の如くして痛む所なく、遂に往生を遂げにける、不思議の事なり。抑、今載する所の自害往生、水漿を断ちて後、五十余日を経る事、殆ど信を取り難しと雖も、彼の子孫、上人の御消息、並びに念珠・袈裟等を相伝して、披露する事、世もて隠れなし。唯これ、尊願が不思議の奇特を載するばかりなり。余人更に好み行ぜよとにはあらず。凡そ、上代上機の事は暫くこれを差し置く。末代当世の行者は機根弱き故に、仮令、思い立つ者ありとも、そ

上人「生けらば念仏の功つもり、云々」と、禅勝房へさずけられる

聖光、自害往生、焼身往生、入水往生、断食往生等を戒む

の期に臨みて、若し後悔の一念も起こりぬべし。然らば何の詮かあらむ。上人も、「生けらば念仏の功積もり、死なば往生疑わず。とても斯くても、この身には思い煩う事ぞなき、と心得て、懇ろに念仏して、畢命を期とせよ」とこそ、禅勝房には授けられけれ。鎮西の聖光房も、「自害往生・焼身往生・入水往生・断食往生等の事、末代には斟酌すべし」と戒め置かれけるとかや。努々好み行ずべからず。深く上人の勧化を信じて、念々相続、畢命為期の行を勤むべきものなり。

〔奥書〕

二十八巻新鬱数廿六丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第二十九巻

〔第一段〕　詞書

比叡山西塔の南谷に、鐘下房の」少輔とて、聡敏の住侶ありけり、」第子の兒にをくれて、眼前の無常」におとろき、交衆ものうくおほえけ」れハ、三十六のとし遁世して、上人の」才子となり、成覚房幸西と号しけ」るか、浄土の法門を、もとならへる天台宗」にひきいれて、迹門の弥陁、本門の弥陁」といふことをたてゝ、十劫正覚といへるハ、」迹門の弥陁なり、本門の弥陁ハ、無始」本覚の如來なるかゆへに、我ホ所具の」佛性と、またく差吴なし、この謂を」きく一念にことたりぬ、多念の遍数、」はなハた無益なりといひて、一念義」といふ事を自立しけるを、上人、こ」の義、善導和尚の御心にそむけり、」はなはたしかるへからさるよし、」制しおほせられけるを、承引せす」して、なをこの義を興しけれハ、わか」第子にあらすとて、擯出せられにけり、」

鐘下房、三十六歳に遁世して、法然上人の弟子となり、成覚房幸西と号す

一念義を自立して、弟子から擯出せられる

釈文

比叡山西塔の南谷に、鐘下房の少輔とて、聡敏の住侶在りけり。弟子の児に遅れて、眼前の無常に驚き、交衆懶く覚えければ、三十六の歳遁世して、上人の弟子となり、成覚房幸西と号しけるが、浄土の法門を、元習える天台宗に引き入れて、迹門の弥陀、本門の弥陀という事を立てて、「十劫正覚といえるは、迹門の弥陀なり。本門の弥陀は、無始本覚の如来なるが故に、我等所具の仏性と、またく差異なし。この謂を聞く一念に事足りぬ。多念の遍数、甚だ無益なり」と言いて、一念義という事を自立しけるを、上人、この義、善導和尚の御心に背けり。甚だ然るべからざる由、制し仰せられけるを、承引せずして、猶この義を興しければ、我が弟子にあらずとて、擯出せられにけり。

〔第二段〕　詞書

兵部卿三位基親卿、ふかく上人勧」進のむねを信して、毎日五万遍の」数遍をこたりなかりけるを、成覚房」一念義をたてゝ、彼卿の数遍を難し」けれハ、重ゝ問答して、成覚房の義」ならひに所存をしるして、上人に尋」申されける状云、念佛の数遍、な

らひニ」本願を信するやう、基親か愚案か」くのことく候、難者いはれなく覚候、」
此折紙に御存知のむね、御自筆を」もてかき給はるへく候、難者にやふ」らるへから
さるかゆへなり、別解別行」のひとにて候はゝ、みゝにもいるへから」す候に、御弟
子ゑの説に候へは、不審」をなし候也、又、念佛者ハ、女犯はゝかるへ」からすと申
あひた、在家は勿論也、」出家ハこはく本願を信すとて、出家」のひとの女にちかつ
き候条、いはれ」なくさふらふか、善導ハ、めをあけて」女人を見るへからすとこそ
候めれ、」此事、あら〳〵仰をかふるへく候、」基親ハ、只ひらに本願を信して、念
仏」を申候也、料簡も才学も候ハさるゆ」へなり、云々、取詮、彼注進の状云、」

基親、取信々本願之様、」

雙巻經上云、設我得佛、十方衆生、至心」信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者
不」取正覺文、同下云、聞其名字、信心歓喜、」乃至一念、至心廻向、願生彼國、
即得往生、」住不退轉文、往生礼讃云、今信知弥陁」本弘誓願及稱名号、下至十
聲一聲等、」定得往生、乃至一念、無有疑心文、」
観経疏云、一者決定深信、自身現是罪」悪生死凡夫、曠劫已来、常没常流轉、」
無有出離之縁、二者決定深信、彼阿弥」陀佛四十八願、摂受衆生、無疑無慮、
乗」彼願力、定得往生文、

此ホの文を案し」候て、基親、罪悪生死の凡夫なりといへ」とも、一向に本願を信して名号をと」なへ候、毎日に五万遍なり、決定ほとけ」の本願に乗して、上品に往生すへき」よし、ふかく存知し候也、このほか、へち」の料簡なく候、しかるに、あるひと、本願を」信する人ハ一念なり、しかれハ、五萬反無」益なり、これ本願を信せさるなりと」申、基親答云、念佛一聲のほか、百遍」乃至万遍は、本願を信せすといふ文候」やと、難者云、自力にて往生ハかなひか」たし、たゝ、信をなしてのちハ、念仏の」かす無益なりと申、基親又申云、自」力往生とハ、他の雑行ホをもて願すと」申さハこそは、自力とハ申候はめ、し」たかひて善導の疏云、上盡百年、」下至一日七日、一心専念弥陀名号、定得」往生、必無疑と候めるは、百年念」仏すへしとこそハ候へ、又、上人の御房、」七万遍をとなへしめまし、基親」御第子の一分たり、よてかすおほく」となへむと存候なり、ほとけの恩を」報するなり、礼讃云、不相續念報彼佛」恩故、心生輕慢、雖作業行、常与名利」相應故、人我自覆、不親近同行善知」識故、樂近雑縁、自障ゝ他往生正行」故、云ゝ、佛恩を報すとも、念仏の数遍」おほく申へしと見えたりと申、云ゝ、」

基親、五万遍怠らず

基親、成覚房の義を記して、法然に邪正を求む

基親、取信して本願を信ずるの様

釈文

兵部卿三位基親卿、深く上人勧進の旨を信じて、毎日五万遍の数遍怠りなかりけるを、成覚房一念義を立てて、彼の卿の数遍を難じければ、重々問答して、成覚房の義並びに所存を記して、上人に尋ね申されける状に云く、「念仏の数遍、並びに本願を信ずる様、基親が愚案斯くの如く候。難者謂れなく覚え候。此の折紙に御存知の旨、御自筆をもて書き給わるべく候。難者に破らるべからざるが故なり。別解・別行の人にて候わば、耳にも入るべからず候に、御弟子等の説に候えば、不審を為し候也。又、念仏者は、女犯憚るべからずと申す間、在家は勿論也、出家は強く本願を信ずとて、出家の人の女に近付き候条、謂れなく候か。善導は、目を上げて女人を見るべからずとこそ候めれ。此の事、粗々仰せを被るべく候。基親は、只、平に本願を信じて、念仏を申し候也。料簡も才学も候わざる故なり」（云々、詮を取る）。彼の注進の状に云く、

基親、信を取りて本願を信ずるの様、

『双巻経』の上に云く、「設し我仏を得たらんに、十方の衆生至心に信楽し

て、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覚を取らじ」（文）。同じく下に云く、「其の名字を聞きて信心歓喜し、乃至一念、至心に廻向して、彼の国に生ぜんと願ぜば、即ち往生を得て不退転に住せん」（文）。『往生礼讃』に云く、「今弥陀の本弘誓願及び名号を称すること、下十声一声等に至るまで、定めて往生することを得と信知し、乃至一念も疑心有ること無し」（文）。『観経疏』に云く、「一には決定して深く、自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁有ること無しと信ず。二には決定して深く、彼の阿弥陀仏四十八願をもって、衆生を摂受したまう。疑い無く慮い無く、彼の願力に乗じて、定めて往生を得と信ず。」（文）。

此等の文を案じ候いて、基親、罪悪生死の凡夫なりと雖も、一向に本願を信じて名号を唱え候。毎日に五万遍なり。決定して仏の本願に乗じて、上品に往生すべき由、深く存知し候也。この外、別の料簡なく候。然るに、或る人、「本願を信ずる人は一念なり。然れば、五万遍無益なり。これ本願を信ぜざるなり」と申す。基親答えて云く、「念仏一声の外、百遍乃至万遍は、本願を信ぜずという文候や」と。難者云く、「自力にて往生は叶い難し。唯、信を為して後は、

念仏の数無益なり」と申す。基親又申して云く、「自力往生とは、他の雑行等をもて願ずと申さばこそは、自力とは申し候わめ。従いて善導の『疏』に云く、上百年を尽くし、下一日七日に至るまで、一心にもっぱら弥陀の名号を念ずれば、定んで往生することを得て、必ず疑い無しと候めるは、百年念仏すべしとこそは候え。又、上人の御房、七万遍を唱えしめます。基親御弟子の一分たり。よて数多く唱えむと存じ候なり。仏の恩を報ずるなり。『礼讃』に云く、相続して念じ、彼の仏恩を報ぜざるが故に、心に軽慢を生じて、業行を作すと雖も、常に名利と相応するが故に、人我自ら覆いて同行・善知識に親近せざるが故に、楽って雑縁に近きて、往生の正行を自障障他するが故なり（云々）。仏恩を報ずとも、念仏の数遍多く申すべしと見えたり」と申す（云々）」

〔第三段〕　詞書

上人御返事云、仰旨、謹奉候畢、」御信をとらしめ給やう、折紙具」に拝見候ニ、一分も愚意の所存に」たかハす候、ふかく随喜したてまつり」候なり、近來、一念の外の数遍無益な」りと申義出来候、勿論不足言の」事に候、文尺をハなれて義を申人、」すてに證を得候欤、如何、尤不審候、」また、ふかく本願を信するもの、破戒」もか

へりみるへからさるよしのこと、こ」れ又、とはせ給にも不可及事欤、附仏」法の外道、ほかにもとむへからす、凡ハ」近來念佛の天魔きおひきたり」て、かくのことき
の狂言いてきたり」候欤、なをゝゝ、左右にあたハす候、云々、取詮、

基親への返状

一分も愚意に違わず

附仏法の外道

釈文

上人御返事に云く、「仰せの旨、謹みて奉り候い畢んぬ。御信を取らしめ給う様、折紙具に拝見候に、一分も愚意の所存に違わず候。深く随喜し奉り候なり。近来、一念の外の数遍無益なりと申す義出来候、勿論不足言の事に候。文釈を離れて義を申す人、既に証を得候か、如何、尤も不審に候。又、深く本願を信ずる者、破戒も顧みるべからざる由の事、これ又、問わせ給うにも及ぶべからざる事か。附仏法の外道、外に求むべからず。凡そは近来念仏の天魔競い来りて、斯くの如きの狂言出で来り候か。猶々、左右に能わず候」（云々、詮を取る）。

〔第四段〕　詞書

成覚房の第子小、越後國にして一」念義をたてけるを、上人の才子」光明房といふひ

しり、多念の行者」なりけるか、心えぬことにおもひて、かの」所述の法門をしるして、上人ニうた」へ申いれけれハ、御返事云、一念往生の」義、京中にも粗流布するところ也、」凡言語道斷のこと也、まことにほと〳〵」御問に不可及欤、所詮雙卷經の下に、」乃至一念信心歓喜といひ、又、善導和」尚ハ、上盡一形、下至十聲一聲ホ、定得」往生、乃至一念、無有疑心といへる、此ホ」の文を、あしく了見するともから、大」邪見に住して申候ところなり、乃至」といひ、下至といへる、みな上盡一形を」かねたることハなり、しかるをちかころ、」愚癡無智のともからおほく、ひとへに」十念一念なりと執して、上盡一形を」癈する条、無慚無愧の事也、まことに」十念一念まても、ほとけの大悲本願」なをかならす引攝し給ふ無上の功德」なりと信して、一期不退に行すへ」き也、文證多しといへとも、これをいた」すにおよはす、いふにたらさる事也、」こゝにかの邪見の人、この難をかうふり」て答ていはく、わかいふところも、信を」一念にとりて念すへきなり、しかりとて、」又念すへからすとハいはすといふ、これまた」詞ハ尋常なるに似たりといへとも、心ハ」邪見をはなれす、しかるゆへは、決定」の信心をもて一念してのちハ、又念せ」すといふとも、十悪五逆なを障を」なさす、いはむや餘の小罪をや、と信」すへきなりといふ、此おもひに住せむ」ものハ、たとひ、おほく念すといふとも、」阿弥陀佛の御心にかなはむや、

いつ」れの経論、人師の説そや、これひと」へに懈怠、無道心、不當、不善のたく」ひの、ほしきまゝに悪をつくらむ」とおもひて申いたせる事也、おほ」よそ、かくのことときの人ハ、附佛法」の外道なり、師子のなかの虫なり、」又、うたかふらくハ、天魔波旬のために」精気をうはゝるゝともからの、もろ〳〵」の往生のひとをさまたけむとする」欤、尤あやしむへし、ふかくおそる」へきものなり、毎事筆端につくしか」たし、謹言、已上、取詮、」

光明房、上人に越後の一念義を訴え申し入れる

釈文

成覚房の弟子等、越後国にして一念義を立てけるを、上人の弟子光明房という聖、多念の行者なりけるが、心得ぬ事に思いて、彼の所述の法門を記して、上人に訴え申し入れければ、御返事に云く、一念往生の義、京中にも粗流布する所也。凡そ言語道断の事也。真にほとほと御問に及ぶべからざるか。所詮『双巻経』の下に「乃至一念、信心歓喜」といい、又、善導和尚は、「上一形を尽くし、下十声一声等に至るまで、定めて往生を得、乃至一念も疑心有ること無し」と言える、此等の文を、悪しく了見する輩、大邪見に住して申し候所なり。乃至といい、下至といえる、皆上尽一形を兼ねたる言葉なり。然

一期不退に行ずべき

附仏法の外道なり、獅子の中の虫なり

るを近来、愚癡・無智の輩多く、偏に十念一念なりと執して、上尽一形を廃する条、無慚・無愧の事也。真に十念一念までも、仏の大悲本願猶必ず引摂し給う無上の功徳なりと信じて、一期不退に行ずべき也。文証多しと雖も、これを出すに及ばず。言うに足らざる事也。ここに彼の邪見の人、この難を被りて答えて云く、「我が言う所も、信を一念に取りて念ずべきなり。然りとて、又念ずべからずとは言わず」と言う。これ又、詞は尋常なるに似たりと雖も、心は邪見を離れず。然る故は、「決定の信心をもて一念して後は、又念ぜず」というとも、「十悪五逆、猶障りを為さず。況や余の小罪をやと信ずべきなり」と言う。此の思いに住せむ者は、仮令、多く念ずというとも、阿弥陀仏の御心に叶わむや。何れの経論、人師の説ぞや。これ偏に懈怠・無道心・不当・不善の類の、恣に悪を造らむと思いて申し出せる事也。凡、斯くの如きの人は、附仏法の外道なり。獅子の中の虫なり。又、疑うらくは、天魔波旬の為に精気を奪わるる輩の、諸々の往生の人を妨げむとするか。尤も怪しむべし。深く恐るべきものなり。毎事筆端に尽くし難し。謹言（已上、詮を取る）。

〔第五段〕　詞書

光明房の状につきて、上人、一念義」停止の起請文をさためらる、かの状云、」當世念佛門ニおもむく行人ハのな」かに、おほく無智誑惑のともから」あり、いまた一宗の癈立をしらす、」一法の名目におよはす、心に道心な」く、身に利養をもとむ、これにより」て、恣に妄語をかまへて諸人を迷」亂す、ひとへにこれを渡世の計と」して、またく来生の罪をかへりみ」す、かたましく一念の偽法をひろ」めて、無行のとかを謝し、あまさへ」無念の新義をたてゝ、なを一稱の」小行をうしなふ、微善なりといへ」とも、善根にをいてあとをけつり、」重罪なりといへとも、罪障にをいて」いよ〳〵勢をます、刹那五欲の樂をう」けむかためニ、永劫三途の業をおそ」れす、人を教示していはく、弥陁の」願をたのむものハ、五逆を憚ことなし、」こゝろにまかせてこれをつくれ、」袈裟を着へからす、よろしく直垂を」きるへし、姪肉を斷へからす、恣ニ鹿」鳥を食へし、云々、弘法大師、吳生羝」羊心を尺して言、たゝ姪食をおもふ」こと、かの羝羊のことし、云々、このともか」ら、たゝ弊欲にふけること、ひとへに」かの類欤、十住心のなかの三悪道の」心なり、たれかこれをあハれまさら」んや、たゝ餘教を妨のミにあらす、か」へりて念仏の行をうしなふ、懈怠」無慚

の業をすゝめて、捨戒還俗の」義をしめす、この本朝にハ外道な」し、これすてに天魔のかまへなり、」仏法を破滅し、世人を惑亂す、妄語」をかまへていはく、然上人の七万遍」の念仏ハ、たゝこれ外の方便なり、内ニ」実義あり、人いまたこれをしら」す、所謂こゝろに弥陁の願をしれハ、」身かならす極楽に往生す、浄土の」業こゝに満足しぬ、このうへになん」そ一遍なりといふとも、かさねて名」号を唱へきや、かの上人の禅房ニ」をいて、門人不二十人ありて秘義を」談するところに、浅智の類ハ、性鈍に」していまたさとらす、利根のともから、」わつかに五人この深法を得たり、」われその一人なり、かの上人の己心中」の奥義なり、容易これをさつけす、」器をえらひて、傳授せしむへし、云々、」風聞の説もし実ならは、皆以虚言」なり、迷者をあハれまむかために、今」誓言をたつ、貧道もしこれを秘」して、いつはりてこのむねをのへ、不実」のことをしるさハ、十方の三寶、まさに」知見をたれ、毎日七万遍の念仏むなしく」その利益をうしなはむ、圓頓行者」の、はしめより実相を縁する、六度萬」行を修して無生忍にいたる、いつれ」の法か、行なくして證をうるや、乞願」ハ、この疑網に堕せむたくひ、邪見の」稠林をきりて、正直の心地をみかき、」将来の鐵城をのかれて、終焉の金臺」にのほるへし、胡國程とをし、思を鴈」札に通す、北陸境はるかなり、心を像」教にひらくへし、山川雲かさなり」て、面を

千萬里の月にへたつれとも、化」導縁あつくして、膝を一佛土の風ニ」ちかつけむ、子細端多し、毛挙に」あたハす而已、承元三年六月十九日、沙門源空云と、取詮、」

一念義停止の起請文

一念の偽法無念の新義

弘法大師、異生羞羊心を釈す

釈文

光明房の状に就きて、上人、一念義停止の起請文を定めらる。彼の状に云く、当世念仏門に赴く行人等の中に、多く無智誑惑の輩あり。未だ一宗の廃立を知らず、一法の名目に及ばず、心に道心なく、身に利養を求む。これによりて、恣に妄語を構えて諸人を迷乱す。偏にこれを渡世の計として、また く来生の罪を顧みず、奸しく一念の偽法を広めて、無行の過を謝し、剰え無念の新義を立てて、猶一称の小行を失う。微善なりと雖も、善根に於いて跡を削り、重罪なりと雖も、罪障に於いて愈々勢を増す。刹那五欲の楽しみを受けむが為に、永劫三途の業を恐れず。人を教示して云く、「弥陀の願を憑む者は、五逆を憚る事なし。意に任せてこれを造れ。袈裟を着るべからず、宜しく直垂を着るべし。婬肉を断つべからず、恣に鹿・鳥を食うべし、云々」。弘法大師、異生羞羊心を釈して言く、「唯婬食を思う事、彼の羞羊の如し、云々」。この輩、唯、弊欲に耽る事、偏に彼の類か。十住心の中の三悪道の心なり。誰かこれを哀れ

妄語を構える

風聞、皆以て虚言

まざらんや。唯、余教を妨ぐのみにあらず、返りて念仏の行を失う。懈怠無慚の業を勧めて、捨戒還俗の義を示す。この本朝には外道なし。これ既に天魔の構えなり。仏法を破滅し、世人を惑乱す。妄語を構えて云く、「(法)然上人の七万遍の念仏は、唯、これ外の方便なり。内に実義あり、人未だこれを知らず。所謂心に弥陀の願を知れば、身必ず極楽に往生す。浄土の業ここに満足しぬ。この上に何ぞ一遍なりというとも、重ねて名号を唱うべきや。彼の上人の禅房に於いて、門人等二十人在りて秘義を談ずる所に、浅智の類は、性鈍にして未だ悟らず、利根の輩、僅かに五人この深法を得たり。我その一人なり。彼の上人の己心中の奥義なり。容易くこれを授けず、器を選びて、伝授せしむべし」(云々)風聞の説、若し実ならば、皆もって虚言なり。迷者を哀れまむが為に、今誓言を立つ。貧道若しこれを秘して、偽りてこの旨を述べ、不実の事を記さば、十方の三宝、当に知見を垂れ、毎日七万遍の念仏虚しくその利益を失わむ。円頓行者の、初めより実相を縁ずる、六度万行を修して無生忍に至る。何れの法か、行なくして証を得るや。乞い願わくは、この疑網に堕せむ類、邪見の稠林を切りて、正直の心地を磨き、将来の鉄城を逃れて、終焉の金台に登るべし。胡国程遠し、思いを雁札に通ず、北陸境遥かなり、心を像教に開くべし。山川雲重なりて、

面を千万里の月に隔つれども、化導縁厚くして、膝を一仏土の風に近付けむ。子細端多し、毛挙に能わずのみ。承元三年六月十九日、沙門源空、（云々、詮を取る）。

〔奥書〕

二十九巻析繋数廿三丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第三十卷

〔第一段〕　詞書

上人の師範、功徳院の肥後阿闍梨皇円ハ、叡山」杉生法橋皇覚の才子にて、顕密の碩才なりき、」しかるに、つら〳〵思惟すらく、自身の機分をはか」るに、このたひたやすく生死を出へからす、もし」たひ〳〵生をあらためは、隔生即忘して、さた」めて仏法をわするへし、今たま〳〵人身をうく」といへとも、恨らくは二仏の中間にして、なを」生死に輪廻せんことを、しかし、長命の報を得て」慈尊の出世にあはむには、命なかきもの、虵に」すきたるハなし、我かならす大虵の身をうくへし、」但、大海ハ金翅鳥の恐あり、池にすまんとおもひて、」遠江國笠原庄に、さくらの池といふ池を、かの所の」領家に申うけて、放文をとり、命終のとき」水をこひ、掌の中に入ておはりにけり、其後、」雨ふらす、風ふかさるに、彼池にハかに水まさり、」大なみたちて、池中のちりもくつ、悉はらひ」あく、諸人耳目をおとろかすよし、かの所より」領家にしるし申たりけれは、その日时をかん」かへらるゝに、彼闍梨命終の日时にてそ有」ける、當时にいたるまて、しつかなる夜ハ、池に」振鈴の音きこゆ、な

とそ申つたへ侍る、」末代にはかゝるためし、ありかたくやハへるらん、」上人の給けるは、智恵ありて、生死の出かたき」ことをしり、道心ありて、慈尊にあはむ事を」ねかふといへとも、よしなき畜趣の生を感せる」こと、しかしなから浄土の法門をしらさるゆへなり、」源空、そのかみ、此法をたつねえたらましかは、信」不信をかへりみす、さつけ申なまし、極楽に」往生のゝちは、十方の國土、心に任て經行し、一切」の諸仏、おもひにしたかひて供養す、何そ必しも、」ひさしく穢土に處することをねかはんや、彼闍梨」はるかに後仏の出世を期して、いたつらにいけに」すみ給ハんこと、いたはしきわさなり、とそ」仰られける、」

功徳院肥後阿闍梨皇円、発願して大蛇の身を受ける

釈文

上人の師範、功徳院の肥後阿闍梨皇円は、叡山杉生法橋皇覚の弟子にて、顕密の碩才なりき。然るに、倩思惟すらく、「自身の機分を量るに、この度容易く生死を出ずべからず。若し度々生を改めば、隔生即忘して、定めて仏法を忘るべし。今偶々人身を受くと雖も、恨むらくは二仏の中間にして、猶生死に輪廻せん事を。如じ、長命の報を得て慈尊の出世に遇わむには。命長きもの、蛇に過ぎたるはなし。我必ず大蛇の身を受くべし。但し、大海は金翅鳥の恐れ

遠江国笠原庄桜の池

あり。池に住まん」と思いて、遠江国笠原庄に、桜の池という池を、彼の所の領家に申し受けて、放文を取り、命終の時水を乞い、掌の中に入れて終わりにけり。其の後、雨降らず風吹かざるに、彼の池俄に水増さり、大波立ちて、池中の塵・藻屑、悉く払い上ぐ。諸人耳目を驚かす由、彼の所より領家に記し申したりければ、その日時を勘えらるるに、彼の閻梨命終の日時にてぞ有りける。当時に至るまで、静かなる夜は、池に振鈴の音聞こゆ、などぞ申し伝え侍る。末代には斯かる例、有難くや侍るらん。上人宣いけるは、「智恵ありて、生死の出で難き事を知り、道心ありて、慈尊に遇わむ事を願うと雖も、由なき畜趣の生を感ぜる事、然しながら浄土の法門を知らざる故なり。源空、その上、此の法を尋ね得たらましかば、信・不信を顧みず授け申しなまし。極楽に往生の後は、十方の国土、心に任せて経行し、一切の諸仏、思いに従いて供養す。何ぞ、必ずしも久しく穢土に処する事を願わんや。彼の閻梨遥かに後仏の出世を期して、徒らに池に住み給わん事、労しき業なり」とぞ仰せられける。

法然上人、浄土の法門を阿闍梨に授けられざるを遺憾とされる

〔第二段〕　詞書

妙覚寺に浄心房とて、さかしきひしりありき、」道心ふかきよしにて、寺門を出す、

念仏を行する」ありさま、常の人にこえたり、歸依する人、雲」霞のことし、五十ハかりにて他界しけるニ、臨終」散〻なりけり、人〻これをあやしみて、妙覚寺」の上人たにも往生せす、いはむや餘人をや、と申」あひけるを、上人聞給て、いさしらす、虚假の」行者にてやありつらむ、と仰られけり、其後、」四十九日の仏事に、上人を請したてまつりて」唱導とす、日来の所化ともあつまりて、種〻の捧」物をさゝけけるなかに、常随の才子衣箱を」取出て、これハ先師年来の所持物なり、ことさら、」とて御布施にたてまつれり、件の箱には、」布の衣袴の尋常なると、布の七帖の」袈裟、ならひに十二門の戒儀をふかくをさめ」たりけり、上人仰られけるは、日来源空か申」つることはたかはさりけり、このひしり、ゆゝ」しき虚假の人なりけり、この所持物をミるに、」徳たけて人にたうとかられて、戒師になら」むとおもふ心にておこなひけるなり、との」給けれは、人ミな不審をひらきけり、」

妙覚寺の浄心房、虚仮の行者なりしこと

釈文

妙覚寺に浄心房とて賢しき聖在りき。道心深き由にて、寺門を出でず。念仏を行ずる有りさま、常の人に超えたり。帰依する人、雲霞の如し。五十ばかりにて他界しけるに、臨終散々なりけり。人々これを怪しみて、「妙覚寺の上人

だにも往生せず、況や余人をや」と申し合いけるを、上人聞き給いて、「いざ知らず、虚仮の行者にてやありつらむ」と仰せられけり。其の後、四十九日の仏事に、上人を請じ奉りて唱導とす。日来の所化ども集まりて、種々の捧物を捧げける中に、常随の弟子、衣箱を取り出して、「これは先師年来の所持物なり、殊更」とて御布施に奉れり。件の箱には、布の衣袴の尋常なると、布の七条の袈裟、並びに十二門の戒儀を深く納めたりけり。上人仰せられけるは、「日来源空が申しつる事は違わざりけり。この聖、由々しき虚仮の人なりけり。この所持物を見るに、徳長けて人に貴がられて、戒師にならむと思う心にて行ないけるなり」と宣いければ、人皆不審を披きけり。

〔第三段〕　詞書

治承四年十二月廿八日、本三位中將重衡卿、」父平相國の命によりて、南都をせめしとき、」東大寺に火かゝりしかは、大伽藍忽に灰燼と」成にき、其後、元暦元年二月七日、一谷の合」戦に、彼中將いけとられて、都へのほりて、大路を」わたされ、さま〳〵のことありき、後生菩提の」事を申あはせむために、其請ありけれは、」上人おはして對面し給て、戒なとさつけ」申されて、念仏のことくハしく教導あり」けり、

このたひ生なからとられたりけるは、いま」一度、上人の見參に入へきゆへにて侍りける」とて、かきりなくよろこひ申されけり、受戒の」布施とおほしくて、雙帋筥をとり出て、」上人のまへにさしをきて申されけるは、御要たるへき物には侍らねとも、御目ちかき所に」をかせ給て、かつは重衡か餘波とも御覧し、」且は思食出候はんたひには、とりわき御廻」向あるへきよしを申さるゝ、上人そのこゝろ」さしを感して、うけとりて出給にけり、」

平重衡、上人と対面

重衡、双紙筥を受戒の布施とする

釈文

治承四年十二月二十八日、本三位中将重衡卿、父平相国の命によりて、南都を攻めし時、東大寺に火罹りしかば、大伽藍忽ちに灰燼と成りにき。其の後、元暦元年二月七日、一谷の合戦に、彼の中将生け捕られて、都へ上りて大路を渡され、さまざまの事ありき。後生菩提の事を申し合わせむ為に、其の請いありければ、上人おわして対面し給いて、戒など授け申されて、念仏の事詳しく教導ありけり。「この度生きながら捕られたりけるは、今一度、上人の見参に入るべき故にて侍りける」とて、限りなく喜び申されけり。受戒の布施と思しくて、双紙筥を取り出して、上人の前に差し置きて申されけるは、「御要たるべ

き物には侍らねども、御目近き所に置かせ給いて、且つは重衡が余波とも御覧じ、且つは思食し出で候わん度には、取り分き御廻向あるべき」由を申さるる。上人その志を感じて、受け取りて出で給いにけり。

〔第四段〕　詞書

東大寺造営のために、大勸進のひしり」の沙汰侍けるに、上人、其撰にあたり給にけれハ、」右大弁行隆朝臣を御使にて、大勸進職たる」へきよし、法皇後白川の御氣色ありけるに、上人申」されけるは、山門の交衆をのかれて、林泉の幽」栖をしめ侍ことは、しつかに仏道を修し、ひとへに」念仏を行せんかためなり、もし勸進の職に」居せは、劇務万端にして、素意もハらそむく」へきよしを、かたく辭申されけり、行隆」朝臣、その心さしの堅固なるをみて、ことのよし」を奏しけれは、もし門徒の中に器量の仁」あらは、挙申へきよし、かさねて仰下されける」によりて、醍醐の俊乗房重源を挙申さる、」つゐに大勸進の職に補せられにけり、」俊乗房伊勢大神宮にまいりて、この願もし」成就すへくは、その瑞相をしめし給へ、と祈請し」けるに、三七日のあかつきうちまとろめるに、唐」装束したる貴女、方寸の玉をさつけ給ふと」おもひて、さめてみれは、彼玉うつゝに袖の」うへにあり、重源これをえて、おほきに

よろ」こひ、珎秘す、其後天下響のことくに應して、」財寶こゝろにまかせけれは、ほとなく金銅の」本尊、もとのことくみかきあらはしたてまつりに」けり、重衡卿の、上人に進するところの鏡を、」結縁のためとて送つかハしけれは、仏を鋳たて」まつる爐のなかに入るに、飛出て、つゐにわき」あはさりけり、不思議の事とそ申あひ」ける、大仏殿の正面の柱にうちつけて侍は、彼の」鏡にてなむ侍なる、」

東大寺造営の勧進聖として、上人がその撰に当たる

上人、固辞し、俊乗房重源を推す

釈文

東大寺造営の為に、大勧進の聖の沙汰侍りけるに、上人、其の撰に当たり給いにければ、右大弁行隆朝臣を御使にて、大勧進職たるべき由、法皇（後白川）の御気色ありけるに、上人申されけるは、「山門の交衆を逃れて、林泉の幽栖を占め侍る事は、静かに仏道を修し、偏に念仏を行ぜんが為なり。若し勧進の職に居せば、劇務万端にして素意もはら背くべき」由を、固く辞し申されけり。行隆朝臣、その志の堅固なるを見て、事の由を奏しければ、若し門徒の中に器量の仁あらば、挙げ申すべき由、重ねて仰せ下されけるによりて、醍醐の俊乗房重源を挙げ申さる。遂に大勧進の職に補せられにけり。俊乗房、伊勢大神宮に参りて、「この願若し成就すべくば、その瑞相を示し給え」と祈請しけるに、

三七日の暁うち微睡めるに、唐装束したる貴女、方寸の玉を授け給うと思いて、覚めてみれば、彼の玉現に袖の上にあり。重源これを得て、大きに喜び珍秘す。其の後、天下響きの如くに応じて、財宝心に任せければ、程なく金銅の本尊、元の如く磨き現し奉りにけり。重衡卿の上人に進ずる所の鏡を、結縁の為とて送り遣わしければ、仏を鋳奉る炉の中に入るるに、飛び出でて遂に沸き合わざりけり。不思議の事とぞ申し合いける。大仏殿の正面の柱に打ち付けて侍るは、彼の鏡にてなむ侍るなる。

〔第五段〕　詞書

寿永元暦のころ、源平のみたれによりて、命を」都鄙にうしなふもの、其数をしらす、こゝに、」俊乗房、無縁の慈悲をたれて、かの後世のくる」しみを救はんために、興福寺東大寺より始て、」道俗貴賤をすゝめて、七日の大念仏を修し」けるに、そのころまてハ、人いまた念仏のいみ」しき事をしらすして、すゝめにかなふもの」すくなかりけれは、俊乗房このことを歓て、人」の信をすゝめむかために、建久二年のころ、上人」を請したてまつりて、大仏殿のいまた半作」なりける軒のしたにて、入唐の时わたしたて」まつれる観経の曼陁羅、ならひに浄土五祖の」影を供養し、又、浄土の

三部経を講せさせた」てまつりけるに、南都三論法相の碩学おほく」あつまりけるなかに、大衆二百餘人、をのゝゝ」ハたに腹巻を着して、高座のきハになみ」ゐて、自宗の義を問かけて、訛謬あらは耻辱」をあたへむと、支度したりけるか、上人まつ」三論法相の深義をのへ、次に浄土一宗の秘賾」をこまやかに尺し給て、末代の凡夫の出離」の要法ハ、口稱念仏にしくはなし、もし念仏を」そしらんともからは、無間地獄におちて、八万」大劫苦を受へきよし、觀仏經の説にまかせ」て説給けれハ、二百余人の大衆よりはしめて、」随喜渇仰きハまりなし、東大寺の一和尚、觀」明房の已講理真、ことに涙にむせひて、八旬の」よはひまてたもてる事ハ、ひとへに此事を」きかむためなり、とそよろこひ申ける、さて」そのついてに、天台円頓の十戒を解説し給ニ、」吾山ハ大乗戒、この寺ハ小乗戒とのへ給けれハ、」大衆存外の氣色ともなりけれとも、當寺」の古老の中に、兼日に霊夢をしめすこと」ありけるを、さきたちて披露しけるに」よりて、斟酌しけるにや、衆徒おのゝゝ」口をとちて、別のことなかりけり、」

釈文

寿永・元暦の頃、源平の乱れによりて、命を都鄙に失う者、其の数を知らず。こ

俊乗房、七日の大念仏を修す

半作の大仏殿の軒下で浄土の三部経を講じる

末代の凡夫の出離の要法は、口称念仏に及ぶものなし

観明房理真、涙にむせび、喜ぶ

こに俊乗房、無縁の慈悲を垂れて、彼の後世の苦しみを救わん為に、興福寺・東大寺より始めて、道俗・貴賤を勧めて七日の大念仏を修しけるに、その頃までは、人未だ念仏のいみじき事を知らずして、勧めに叶う者少なかりければ、俊乗房この事を歎きて、人の信を勧めむが為に、建久二年の頃、上人を請じ奉りて、大仏殿の未だ半作なりける軒の下にて、入唐の時渡し奉れる『観経』の曼陀羅、並びに浄土五祖の影を供養し、又、浄土の三部経を講ぜさせ奉りけるに、南都三論・法相の碩学多く集まりける中に、大衆一百余人各々肌に腹巻を着して、高座の際に並み居て、自宗の義を問いかけて、訛謬あらば恥辱を与えむと、支度したりけるが、上人まず三論・法相の深義を述べ、次に浄土一宗の秘賾を細やかに釈し給いて、末代の凡夫の出離の要法は、口称念仏に如くはなし。若し念仏を謗らん輩は、無間地獄に墜ちて、八万大劫苦を受くべき由、『観仏経』の説に任せて説き給いければ、二百余人の大衆より初めて、随喜渇仰極まりなし。東大寺の一和尚、観明房の已講理真、殊に涙に噎びて、「八旬の齢まで保てる事は、偏に此の事を聞かむ為なり」とぞ喜び申しける。さてその序に、天台円頓の十戒を解説し給うに、「吾が山は大乗戒、この寺は小乗戒」と述べ給いければ、大衆存外の気色ともなりけれども、当寺の古老の中に、兼日に

霊夢を示す事ありけるを、先立ちて披露しけるによりて、斟酌しけるにや、衆徒各々口を閉じて、別の事なかりけり。

〔第六段〕　詞書

上人、やまとうたを事とし給ハさりけれとも、我國」の風俗にしたかひて、法門によせては、とき〳〵おもひ」をものへられけるにや、あるひハ門才のなかにしるし」をけるを申つたへ、あるひはてつからかきつけ給へる」を、没後に披露しける、」

春」

さへられぬひかりもあるををしなへて」へたてかほなるあさかすみかな」

夏」

われはたゝほとけにいつかあふひくさ」こゝろのつまにかけぬ日そなき」

秋」

あみた仏にそむる心のいろにいては」あきのこすゑのたくひならまし」

冬」

ゆきのうちに仏のミなをとなふれは」つもれるつみそやかてきえぬる」

逢仏法捨身命といへることを、」

かりそめの色のゆかりのこひにたに」あふには身をもをしミやハする」

勝尾寺にて、」

しはのとにあけくれかゝるしらくもを」いつむらさきの色にみなさむ、此哥入玉葉集」

極ふ往生の行業には、余の行をさしをきて、」たゝ本願の念仏をつとむへしといふことを、」

あミた仏といふよりほかはつのくにの」なにはのこともあしかりぬへし」

極ふへつとめてはやくいてたゝは」身のおはりにはまいりつきなん」

阿ミた佛と心はにしにうつせみの」もぬけハてたるこゑそすゝしき」

光明遍照十方世界、念仏衆生攝取」不捨のこゝろを、」

月かけのいたらぬさとはなけれとも」なかむる人の心にそすむ、此哥入續千載集」

三心の中の至誠心のこゝろを、」

往生はよにやすけれとみなひとの」まことの心なくてこそせね」

睡眠の时、十念を唱へしといふ事を、」

阿ミた仏と十こゑとなへてまとろまむ」なかきねふりになりもこそすれ」

上人てつからかきつけ給へりける、」

ちとせふるこまつのもとをすみかにて」無量寿仏のむかへをそまつ」

おほつかなたれかいひけむこまつとは」雲をさゝふるたかまつの枝」
いけのミつ人のこゝろにたりけり」にこりすむことさためなけれは」
むまれてはまつおもひ出んふるさとに」ちきりしとものふかきまことを、此哥入新千載集」
阿弥陀仏と申はかりをつとめにて」浄土の荘厳みるそうれしき」
元久二年十二月八日　源空

上人の和歌

釈文

上人、和歌を事とし給わざりけれども、我が国の風俗に従いて、法門に寄せては、時々思いをも述べられるにや、或は門弟の中に記し置けるを申し伝え、或は手ずから書き付け給えるを没後に披露しける。

春
障えられぬ光もあるを押し並べて隔て顔なる朝霞かな

夏
我は唯仏に何時か葵草心の端に懸けぬ日ぞなき

秋

阿弥陀仏に染むる心の色に出でば秋の梢の類ならまし

冬

雪の中に仏の御名を唱うれば積もれる罪ぞやがて消えぬる

「仏法に逢いて身命を捨つる」といえる事を、

仮初の色の由縁の恋にだに逢うには身をも惜しみやはする

勝尾寺にて、

柴の戸に明け暮れ懸かる白雲を何時紫の色に見做さむ（此の歌『玉葉集』に入る）

「極楽往生の行業には、余の行を擱きて唯本願の念仏を勤むべし」という事を、

阿弥陀仏というより外は津の国の難波のことも芦刈りぬべし

極楽へ勤めて早く出で立たば身の終わりには参り着きなん

阿弥陀仏と心は西に空蟬の蛻け果てたる声ぞ涼しき

「光明は遍く十方の世界を照らし、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず」の心を、

月影の至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ（此の歌『続千載集』に入

る）

三心の中の至誠心の心を、
往生は世に易けれど皆人の誠の心なくてこそせね
「睡眠の時、十念を唱うべし」という事を、
阿弥陀仏と十声唱えて微睡まむ永き眠りになりもこそすれ
上人手ずから書き付け給えりける、
千歳経る小松の幹を住処にて無量寿仏の迎えをぞ待つ
覚つかな誰か言いけむ小松とは雲を支うる高松の枝
池の水人の心に似たりけり濁り澄むこと定めなければ
生まれてはまず思い出でん古里に契りし友の深き誠を（此の歌『新千載集』に入る）
阿弥陀仏と申すばかりを勤めにて浄土の荘厳見るぞ嬉しき

元久二年十二月八日　源空

〔奥書〕

三十巻折紙数廿一丁

四十八巻繪傳　知恩院常住